佐久考古通信

No. 31
1984, 8, 15
佐久考古学会

昭和59年度総会報告 …… 1
昭和59・60年度佐久考古学会役員の紹介 …… 2
奈良埋蔵文化財センター「中近世遺跡調査過程」の研修に参加して（森泉かよ子）3
愛知紀行　たった一日の旅　（小山　岳夫）…… 4
調査速報（佐久市・小諸市・御代田町）…… 5
事務局からのお知らせ …… 6
後　記 …… 6

昭和59年度総会報告

去る6月9日、佐久市岩村田浅間会館に於て昭和59年度の総会及び講演会が開かれました。

会長挨拶の後、林会員を議長に選出し議事に入りました。第1号～3号議案までの討議を行ない、原案通り議決されました。58年度会務報告の中で、黒岩副会長より矢出川遺跡の保存対策についての詳細な経過報告及び花岡会員より研究報告書第1集についての経過報告がなされました。さらに第4号・5号議案は、別記のように、会務のスムーズで内身の濃い運営をめざして役割を分担すべく選任されました。

その他、福島会員より県考古学会の現在の状況として、対文化課との関係について、文化財行政の指導的立場にありながら、中央道の盛土保存問題、市町村に対する姿勢、埋文センターのかかえる問題など一連の軟弱で低劣な態度に、県考古学会としても断じて許し難いとして、抗議の要望書を提出する決議がなされている旨の報告があった。

議事終了後、岡谷市教委の高林重水氏により、「橋原遺跡の調査報告　弥生式土器を中心として」の講演がスライドを中心に行なわれた。日頃ほとんど接しられない岡谷地方の遺構と遺物を多量のスライドで見られたいへん有意義でした。今度は実際に岡谷へ出かけて佐久と岡谷の土器を結ぶ親縁性を実見しようと思いを改たにさせられた会員も多くあったようです。

その後、近くのホテルにて懇親会が行なわれ、会員相互の交流を深めました。

（文責　林　幸彦）

昭和59・60年度佐久考古学会役員の紹介

◎ 会　　長　由井　茂也

◎ 副 会 長　黒岩　忠男・白倉　盛男

◎ 事務局長　木内　捷

幹　事　井出　正義・林　幸彦・福島　邦男・高村　博文・島田　恵子
花岡　弘・森泉　かよ子・小山　岳夫・堤　隆

＊ 庶　務　高村　博文・林　幸彦

＊ 会　計　島田　恵子

＊ 書　記　花岡　弘・小山　岳夫・堤　隆

＊ 通信編集　井出　正義（編集長）　高村　博文・福島　邦男
森泉　かよ子・小山　岳夫・堤　隆

＊ 見学旅行　林　幸彦・福島　邦男・花岡　弘

＊ 地区委員

I地区（軽井沢町・御代田町・小諸市）
尾台　卓一・渡辺　重義

I地区（北御牧村・浅科村・立科町・望月町）
掛川　喜四郎

I地区（佐久市）
森泉　定勝・井上　行雄・大井今朝太・佐藤　敏

IV地区（臼田町・佐久町・八千穂村・小海町）
三石　延雄

V地区（北相木村・南相木村・南牧村・川上村）
由井　明・土屋　忠芳

VI地区（佐久地域外の地区）
白田　武正

＊会計監査委員　由井　明・井上　行雄

奈良埋蔵文化財センター「中近世遺跡調査過程」の研修に参加して

森泉　かよ子

研修は6月12日から約10日間にわたり、一日2テーマを設け、各先生方の講義をうかがった。テーマは遺構中心に展開され『集落』・『窯址』・『墳墓』等々多岐に渡り、中近世遺跡の総集編というか入門編であり、全体像の把握に大いに役立つものであった。

中近世遺跡は、原始・古代に比して発掘調査例が少なく体系的に整っておらず、これから調査例が増すことで、具体的な問題点の提示がなされるという段階といえるようだ。

今回は遺構中心ということで、遺物についてはほとんど触れず、平安時代から室町時代にわたる各遺構例が示された。

まず集落形態については(1)、石川県寺家遺跡によると、平安時代後期ころより溝による分割がなされ、鎌倉時代にはその溝が広くなり屋敷を囲むのであるが、その屋敷内でも溝を作り有力者とそれに従う者とを分けて住む階層性がみられるようである。古墳時代より、用途に分かれた建物の存在—例えば、倉、井戸等—があらわれてくるが、掘立柱建物址によりその機能分化がより進み、溝で区割された中に、主棟、倉（総柱が多い）、井戸等が必ず備えられているようである。また、この屋敷地の一定の方角に墓を作っている例もある(2)。

城下町の例として、戦国期に越前一乗谷に居館を構えた朝倉氏の城戸内(きどうち)の発掘調査例(3)がある。細長い谷を北と南に土塁を設けて区切り、居館、待屋敷・寺町・町屋を構成しているものである。朝倉義景の居館は、東側谷中央の山城を降りてきたところにあり、土塁をめぐらし、外側に堀を設けている。15棟の建物が検出され、主殿、倉庫、台所、馬屋、泉殿等、礎石を使用しており、池をもつ庭園も設けられている。

武家屋敷は町割がなされ、道路を通して、道路に面して門を設け、間口の狭い奥行きの広い屋敷を土塁で囲っている。建物は掘立柱建物址で、溝による仕切空間があり、井戸、および便所に使用されたであろう石組、また埋められた越前焼のカメは財蔵に使用されたとしているものがセットでみられ、池はないが庭、茶室等も敷地内にある。これに対して、屋敷の区割を溝・柵、塀のみで区割する小さな屋敷群があり、隣の屋敷と雨落ちの溝を共有する程に間口いっぱいに建てられ、石組1（便所）、井戸1、竈1、を備えるものであり、下級武士の館ともされている。これに特殊な遺物—鉛・曲物等々—を出土する小さな屋敷があることから職人達の家であろうとされ、人家の集中した町屋の存在もあったようである。

このように、中世の遺構も発掘調査により再現されつつあるが、現在の集落と一致している場合が多く、京都・東京などの都市の調査は誠に大変なものである事等もお話にあった。

中近世の遺跡はもっとも現在に近いのにもかかわらず、遠い存在である現状を踏まえて、さ

聖地御射山

佐々木　宗昭

霧ケ峯の南腹、八ツ島湿原の畔に御射山という地籍がある。この一部に平坦な凹地部を三方からとりかこむ丘陵面の地形がある。ここが「御射山祭祀遺跡」がある。

△御射山とは諏訪大社下社（里宮）の奥社（山宮）の地名であり、古来より神聖視された場所であった。つまり中世にあっては、この場所において御射山祭と称する大神事が行なわれた。△この神事の本儀は、いけにえ信仰に起因するものである。一つの霊が失なわれ去ることにより、より新たかな霊が宿り、生まれるという考え方があり、それが五穀の豊穣への深い祈りとして春から秋にかけて、里での収穫が取り終る季節のふし目ふし目に斎行された。△此の御射山遺跡は、三方の丘陵面に階段状の遺構を構築している点が大きな等色とされ、過去三回にわたる発掘調査の結果、階段状遺構の地形は、ほぼ全体的に楕円形であり、その外郭は長径三七〇メートルに及び、内郭すなわち凹地部はやや三角形をなした平坦地で、底辺二〇〇メートル、高さ一三〇メートルの規模をもつ遺跡であることが判明した。そして此の階段は最高九メートルの幅をもち、高さも最高四メートルを測るものであり、三方の丘陵における階段の数は必ずしも同じでなく、高さも不規則なものであった。△此の遺跡のもう一つの特色としては、土師質土器を中心とする杯（埦）と皿の破片が多量に出土することであり、その数は約一万四千片以上にも及び、完形品は九十七個である。そして、その大半が手づくね製のものであることも一つの特色とされよう。△この点について金井典美「諏訪信仰史」によると、多量の破片が出土するのに対し完形品が極めて少ないことは「意図的に破壊」したのではないかと述べている。即ち、「土器わり」と称する風習があったという話は、しばしば聞かれるところであり、こうした行為により物の清浄、一回性を期したのであろう。現に伊勢神宮出雲大社にもこれに似た事が行なわれており、京都神護寺で行なわれる「かわらけ投」と称する厄除け祈願に付随する習わしも此れと同じ意味をもつものであろう。△昨年調査された樋村遺跡からは多数の住居址が検出され、そのほとんどが「カマド」を伴なっていた。しかし、中には意図的に壊したと思われるものもあり、ある意味ではカマド（火）に関する信仰的行為によるもので、前述した「土器わり」、「かわらけ投」と同じ意味を含むものである。推考されよう。△又、現在神社において六月、十二月に執り行なわれる大祓式に罪、穢を祓う祭詞として「大祓詞」があるが、その祭詞文の中に「天ツ菅曾（すがそ）ヲ本苅断（もとかりた）チ末（すえ）苅切（かりき）リテ八針（やはり）ニ取辟（とりさ）キテ天ツ祝詞（ふとのり）ノ太祝詞事（とごと）ヲ宣レ」とあるが、此れはその時の神事に用いた小さな弓矢、剣、鉾、白布等を折りくだき、或は引き裂くことを意味し、式の終了後に川に流すわけであるが、こうした事も、前述してきた習わしと同じ意味をもつ共通した信仰的基盤から成り立っていると思えてならないのである。

もかかわらず、三人の目は一様に輝きを増していた。佐久平では曖昧であった歴史時代土器編年の確立、それに伴う遺構の変遷過程の解明、また、川越焼窯の再現等々、今回の旅は佐久の歴史を考える上で大きな一歩を踏みだしたものと信じている。　1984.7.9

調査速報

鋳師屋遺跡群鋳師屋遺跡

小山　岳夫

佐久市小田井に所在する遺跡で、低湿地が樹枝状に入り組んだ小台地上から、奈良～平安時代の住居址4棟、竪穴状遺構6基、溝状遺構2基、土坑、ピット等100余基が検出された。

遺物は、土師器・須恵器・縄文土器・打製石斧・馬骨片等があり、須恵器の占める割合が高い。馬骨片は東南に位置する野火付遺跡でも多量に検出されており、その有機的な関連性は遺跡の性格を考える上で、注目に値する。

野馬久保遺跡

林　幸彦

本遺跡は、蛇塚B遺跡群の南西を占めている。サンエス電気製作所工場新築に際して、緊急発掘調査を6月7日～12日の6日間実施した。検出された遺構は、平安時代住居址2軒であり、出土遺物は灰釉陶器・土師器・須恵器・鉄器がある。特に2号住の杯の出土量には目を見張らせるものがあり、個体の知れるもので約70個以上を数える。さらに、南北1m、東西2mあまりのベッド状遺構もこの時期としては特異である。

大井城跡（黒岩城跡）

林　幸彦

鎌倉・室町時代に大井氏が居城とした平山城で、石並城・王城・黒岩城をあわせて大井城とよばれている。今回、県史跡解除となったのは、黒岩城の南端である。8月上旬現在調査対象地の表土を除去したところであるが、弥生時代～鎌倉時代の実に長い時期にわたった遺物が出土しており、城に関する遺構の他に住居址等も埋蔵しているかのように思われる。

宮ノ反遺跡

花岡　弘

南場整備事業に伴う事前調査で、8月1日現在、7棟の住居址（古墳時代後期後葉～平安時代前葉）のほか、掘立柱建物址3棟、溝1基、土坑6基が検出されている。

遺物には、土師器、須恵器、刀子、鉄製紡錘車、釘、滑石製丸玉、土製丸玉などがある。

鋳師屋遺跡群野火付遺跡

堤　隆

野火付遺跡の調査は八月初旬をもってほぼ完了の予定ですが、約1万平米にわたる調査区からは、奈良時代の住居址7軒、平安の住居址8軒の他、ひとつの区画を意味するような溝、井戸址や、中近世にわたる小竪穴状遺構群、柱穴群、掘立柱や、100をゆうに越える土坑群が発見されています。また、平安時代と考えられる葬埋馬の土坑墓6基のほか、人骨を埋葬した土坑墓（土葬及び火葬墓）数基も検出されました。

事務局からのお知らせ

○ 矢出川遺跡群保存にむけての公開例会のお知らせ

8月11日(土)の矢出川遺跡保存対策特別小委員会で、矢出川遺跡群の重要性を地元の人々に理解していただくため、南牧村で何か催し物を行なおうと話し合われました。

そこで、佐久考古学会としてもこれに便乗して、公開例会的に勢力を集中してとり組ことになりました。時期としては、10月下旬～11月初旬頃とはっきりしていませんが、内容の打合せを9月8日(土)第3回例会を利用して、佐久市埋文資料室で行ないます。多数参加して、素晴しい催しものとなるよう努力しましょう。

○ 例会について

本年度の例会は、総会でも提案があったように『赤い土器を追う』を主テーマに弥生時代の基礎講座を行なうことになりました。第1回7月14日は、花岡会員による弥生前期、第2回8月11日は、小山会員による弥生中期の講座が行なわれました。第3回9月8日は、林会員による弥生後期、第4回10月13日は、高村会員による総括(1)、第8回昭和60年2月9日は、臼田会員による総括(2)を行なう予定です。ぜひ誘い合って例会に参加しましょう。

○ 佐久考古通信№30までの合冊製本希望者の募集について

佐久考古通信は、昭和50年9月26日に№1を発行以来、昭和59年6月5日発行で№30になりました。これを一区切りに合冊し、また、№30までの目次及び著者名索引を作成し製本することになりました。合冊製本を希望する人は事務局に申し込んで下さい。尚、その際、自分で所有している通信を調べていただき、不足の号を書きとめて事務局に提出して下さい。

後記

夏はエネルギーを最大に使って活動する時期それぞれの研究にとりくんでいることと思いますが、体には注意して頑張って下さい。本号から編集を縦書きから横書きに改めました。発刊から10年となり通信もしっかり根をはり始めたように思われます。これからもみんなでますます大きな木に育てましょう。 (H・T)

佐久考古通信№31号
発行所：佐久考古学会
長野県佐久市岩村田1040～7
木内 捷方(〒385)
TEL 0267-8-0617
発行者：由井 茂也
編集者：井出正義(編集長) 高村 福島
森泉 小山 堤

佐久考古通信

№32
1984, 12, 1
佐久考古学会

旅行記　みちのくの多賀城をたづねて　（林幸彦）…… 1
発掘に参加して　（林泉定勝）…… 2
北西久保遺跡の石造塔婆群　（井上行雄）…… 2
野火付遺跡の一考察　（尾台卓一）…… 3
歴史学習で思うこと　（臼田武正）…… 3
聖地御射山　（佐々木宗昭）…… 4
学会に入って　（倉見渡）…… 5
縄文人のささやき　（掛川喜四郎）…… 5
古代人の洗科土合を想う　（峯村今左太）…… 5
「報告」池の平遺跡発掘調査の概報　（池の平遺跡発掘調査団 中村由克）5
後　記…… 6

旅行記　みちのく多賀城跡をたづねて―前編―

林　幸彦

昭和５９年１０月２日早朝６時珍しく定刻に、バスは一路多賀城市をめざして佐久市役所を出発した。途中岩村田勢も加わり、由井会長以下総勢２３名となる。参考までに運転手さんは、中沢泰明、小林安一の両氏で、420㎞の旅定である。秋たけなわの軽井沢高原も碓氷峠を越すと木立は一変してまだまだ青々としている。上州と佐久の気候の違いをまざまざとみせつけられる。九十九川と烏川の合流点あたりより北関東平野の広大さがいやでも眼前に広がり、沿道のあちこちに巨大な前方後円墳が姿を現しはじめる。この高崎市から伊勢崎・太田・足利市、にかけては、人物・器材などの著名な埴輪が出土した塚廻古墳群や天神山古墳などが所狭しと居並んでいる。

さて、快走してきたバスも自然の要求を満たすため桐生にて小休止をする。佐野インターから東北自動車道に入る。矢坂Ｉ・Ｃを過ぎる頃には、前、後部座席に備えた気付け薬もビンの底にわずかとなり、皆の血色が良好となる。途中沿道の古代から中・近世に至る歩く歴史辞典の井出先生と歩く地質辞典の白倉先生のご説明も那須Ｓ・Ｐで昼食をとるため一時休止。昼食後、安達太良山を横目に泉ＩＣまで無事到着する。

発掘に参加して

森泉　定勝

以前から考古学に興味を持ってはいましたが、「下前田原の古墳発掘に参加して見ないか」と勧められ、六十の手習とは思いましたが参加させて頂きました。

一日目には木を切ったり、草を刈ったりして終りました。二日目から先輩の皆さんから色々と教えて頂きました。一号古墳の石室内は盗掘されていて遺物は余りなく羨道羨門も大分破壊されていました。前庭部から土師器、須恵器の破片が多数出土しました。

二号墳の前庭部から甕形土器、高杯など検出され、土師器片、須恵器なども多数出土しました。羨道羨門もはっきり検出され、石室内は、鉄平割石及び河原石が敷かれていました。その上から切子玉、ガラス小玉（280個位）が発見され、また人骨3体分位が検出されました。線香をたき、与良先生と井上さんと三人で般若心経を上げ回向しました。

それから上の城遺跡、西一里塚遺跡と次々と参加して、住居跡、その他の遺構など検出し、それらを掘下げて完掘した時の感激・満足感は何物にもかえられません。また、多勢の皆さんとの交流もできました。

しかし、悲しいことは、専門の学校も出ておらず勉強も足らないので、自分で掘った遺跡の報告書を自分で書く事が出来ない事です。けれども自分は遺跡を発掘する事で満足しています。

北西久保遺跡の石造塔婆群について

井上　行雄

北西久保石造塔婆群は、弥生時代より古墳～平安期までの大遺跡の唯中に所在している。

いまさだか　証はならぬ五輪塔
遠き祖先の　大きさぞ知れ

これは元佐久市教育長浅沼馨香氏より贈られた短歌である。同塔婆群は昭和41年3月、果樹改植中偶然発見された。まず、宮下真澄により調査された後、第二次調査は昭和44年12月に佐久市教育委員会によって行われた。調査担当者は駒大倉田芳郎助教授、補助員には同大考古研の男・女学生数名がなり、地元協力者10名と伴に約十日間に亘り調査が行われた。五輪塔の前庭より、現在の桃畑の南端に至るまでトレンチをいれ、地下1米余掘り下げた結果、弥生の住居址や土壙墓等が確認された他、塔婆群は養蚕小屋の中程までのびていることが明らかとなった。だが、残念至極にも期日、予算等の関係上、調査は中断され、残る数カ所の遺構は調査未了のまま無残にも削平されてしまった。担当者は他村の調査も兼ねていたらしく、現場へ来てもすぐに出かけ、夕方遅く帰るという体たらくで、不在の日が多かった。

発掘終了後降雨あり。翌日、新村薫氏が来訪し五輪塔前庭より〝熙寧元宝〟等北宋銭四枚を表採された。この塔婆群の被葬者や塔の造立年代が不明なことは、浅沼氏の短歌によく表現されている。

49年12月に佐久市旧跡として指定され、現在に至っている。

野火付遺跡の一考察

尾台　卓一

御代田町野火付遺跡の発掘調査に当り、団長を始め調査員各位の一方ならざるお骨折により多大なる成果を得て終了しました事に対し厚く御礼申しあげます。

野火付地帯は稍高台で小田井田圃としては、地味粗薄にして、水便悪しく水喧嘩の絶えない所といわれ、すぐ南隣地の（佃田（ツクダ））は凹地で地味も良好水系も整い一等田地と称されていた。この佃田の名称は各郷村にあったと思われるが、現在御代田の佃田と桜井の佃田として地名が残っている。佃田は荘園時代地頭が管理支配し年貢を上納していた。

京都の大徳寺は八条院領の年貢徴収を依頼され、佐久の地頭大井・伴野市に佃田の年貢不納をなじり納入の督促状が古文書に残されている。段々佃田は地頭の領有化甚しく地頭の自作地迄に進展し、近くの郷村住民に使役を強制したものと思われる。野火付もその一郷村ではなかったかと思われる。

荘園時代一戸を一保と称し、一保は十人から二十四、五人位迄一保と称し、一保が五十保集って一郷と称した。

佐久は八郷あったので四百保、一保に二十人として人口は八千人位となる計算。

野火付と佃田の境に御影道があり道型も二メートル位あり、六角形の石燈籠が立ってあった。東山道に関係がありはしないかと思われる。

歴史学習で思うこと

臼田　武正

小学校６年の社会科では、日本の歴史について学習することになっているが、機会あって子どもたちと学ぶ中から、いくつか示唆された点があるので述べてみたい。

子どもたちは知的欲求の高まる発達段階ということもあるが、歴史に対する興味関心には強いものがある。特に原始古代関係では、身近に見学調査できる遺跡や実際に触れることのできる遺物など具体的資料を通しての学習と火おこし、土器づくり、竪穴住居づくりなどの体験学習は実に意欲的である。

ところが、このような子どもたちを取り巻く学習環境はまことに不備だといわざるを得ない。子どもたちの住む地域には価値ある歴史事象が多々あるにもかかわらず、それらの素材が教材化されて学習展開された例はあまりにも少ない。たとえ教材化を試みても資料が整備されていなかったり教師の歴史認識の問題から素材を掘り起こせなかったりして、とにかく、地元の貴重な歴史をほとんど生かすことができないのである。このような実状を考えると、学校教育や社会教育の領域はもちろんのこと、考古学研究の立場においても広い意味での教材化を見通した資料づくり（スライド・ビデオ・解説書・地図・年表など）や各種実験考古学教室の開催、遺物の効果的な展示公開などが必要に思われる。もっともっと考古学研究は教育事業に力を注いでもいいのではないか。

聖地御射山

佐々木　宗昭

霧ケ峯の南腹、八ツ島湿原の畔に御射山という地籍がある。この一部に平坦な凹地部を三方からとりかこむ丘陵面の地形がある。ここが「御射山祭祀遺跡」がある。

△御射山とは諏訪大社下社（里宮）の奥社（山宮）の地名であり、古来より神聖視された場所であった。つまり中世にあっては、この場所において御射山祭と称する大神事が行なわれた。△この神事の本儀は、いけにえ信仰に起因するものである。一つの霊が失なわれ去ることにより、より新たかな霊が宿り、生まれるという考え方があり、それが五穀の豊穣への深い祈りとして春から秋にかけて、里での収穫が取り終る季節のふし目ふし目に斎行された。△此の御射山遺跡は、三方の丘陵面に階段状の遺構を構築している点が大きな等色とされ、過去三回にわたる発掘調査の結果、階段状遺構の地形は、ほぼ全体的に楕円形であり、その外郭は長径三七〇メートルに及び、内郭すなわち凹地部はやや三角形をなした平坦地で、底辺二〇〇メートル、高さ一三〇メートルの規模をもつ遺跡であることが判明した。そして此の階段は最高九メートルの幅をもち、高さも最高四メートルを測るものであり、三方の丘陵における階段の数は必ずしも同じでなく、高さも不規則なものであった。△此の遺跡のもう一つの特色としては、土師質土器を中心とする杯（坏）と皿の破片が多量に出土することであり、その数は約一万四千片以上にも及び、完形品は九十七個である。そして、その大半が手づくね製のものであることも一つの特色とされよう。△この点について金井典美「諏訪信仰史」によると、多量の破片が出土するのに対し完形品が極めて少ないことは「意図的に破壊」したのではないかと述べている。即ち、「土器わり」と称する風習があったという話は、しばしば聞かれるところであり、こうした行為により物の清浄、一回性を期したのであろう。現に伊勢神宮出雲大社にもこれに似た事が行なわれており、京都神護寺で行なわれる「かわらけ投」と称する厄除け祈願に付随する習わしも此れと同じ意味をもつものであろう。△昨年調査された樋村遺跡からは多数の住居址が検出され、そのほとんどが「カマド」を伴なっていた。しかし、中には意図的に壊したと思われるものもあり、ある意味ではカマド（火）に関する信仰的行為によるもので、前述した「土器わり」、「かわらけ投」と同じ意味を含むものである。推考されよう。△又、現在神社において六月、十二月に執り行なわれる大祓式に罪（けがれ）、穢を祓う祭詞として「大祓詞」があるが、その祭詞文の中に「天ツ菅曾（すがそ）ヲ本（もとかりた）苅断チ末（すえかりき）切リテ八針（やはり）ニ取辟（とりさ）キテ天ツ祝詞（ふとのりとごと）ノ太祝詞事ヲ宣レ」とあるが、此れはその時の神事に用いた小さな弓矢、剣、鉾、白布等を折りくだき、或は引き裂くことを意味し、式の終了後に川に流すわけであるが、こうした事も、前述してきた習わしと同じ意味をもつ共通した信仰的基盤から成り立っていると思えてならないのである。

学会に入って

倉見　渡

昭和55年の夏、望月町の又久保遺跡発掘調査の作業に始めて参加しました。福島さんや調査員の方々の御指導、御教授を受けながら縄文式土器や石器、平安時代土師器・須恵器などの勉強を楽しく行なうことができました。また、町内外を問わず多くの方々と知り合いになったことも嬉しいことの一つです。

今年は、佐久考古学会に入会させていただき、新しい方々とふれ合いをもつことができました。さまざまな内容に取り組んでいるわけですが、できるだけ協力をし、先輩達の後から遅れない様について行きたいと思います。

古代の浅科村土合を想う！

峯村　今左太

布施川が千曲川に流入する附近を字名土合といいます。この畑地帯には土器の破片が散在しています。又、古墳が数基ありまして、一号古墳からは円頭把頭の刀、銀象嵌鐔等出土しています。爪生坂祭祀遺跡が発見されてからは、古東山道の爪生坂越えが確認されまして、土合が千曲川渡河地点だといわれます。

私は小さい頃から畑仕事のため両親に連れられてこの土合に来て、石器、土器に接して育ってきました。この土合の古き文化を、少しでも解したい。これが私の願いです。何とぞ御指導の程をお願いしてご挨拶とします。

縄文人のささやき

掛川　喜四郎

私は昨年6月に、望月町春日の竹之城原遺跡の発掘調査に初めて参加しました。

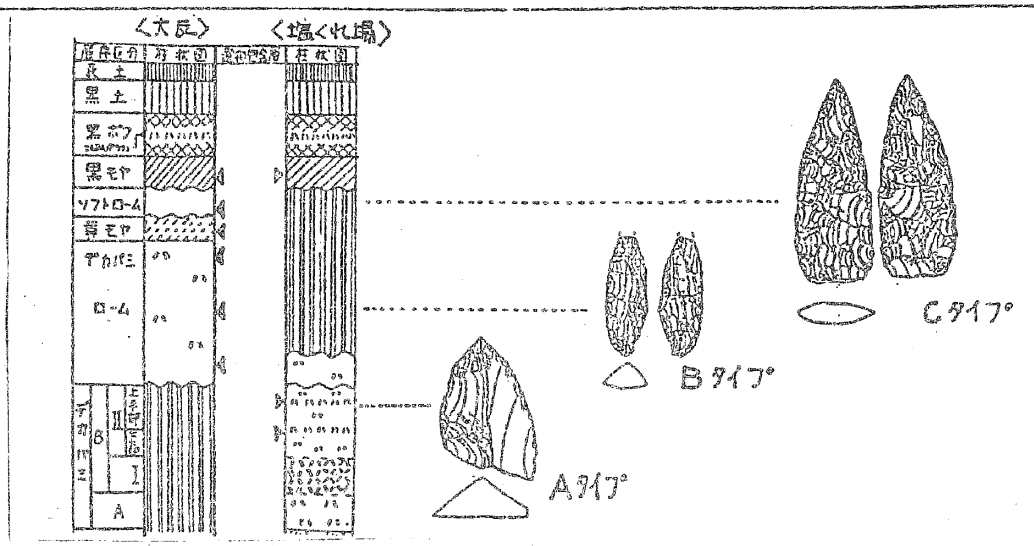
割り当てられたグリットを丁寧に掘下げていくうちに、黒色土中より1片の土器が出土し、私を興奮させました。それは、何千年も昔の人々がここで生活をし、この土器を使用していた明らかな証拠であります。そこからは、縄文人の生活の匂いやざわめきが伝わって来るような感動を覚えました。遥かな時の隔てはあっても、私達の先人が、身近な所で生活していたとわかると、なにやら縄文人の声が聞えてくるような不思議な気持ちになりました。

池の平遺跡発掘調査の概報

池の平遺跡発掘調査団

8月2日から9日まで八千穂村にて第2回池の平遺跡発掘がおこなわれました。調査には、八ケ岳のおいたちをしらべている八ケ岳団体研究グループ（信州大学理学部地質学教室）と中南信・東北信・北関東・ひがし東京の野尻湖友の会、そして地元八千穂村との三者で調査団を結成し、小学校以下の約180人の参加者があり、団長には出浦深教育長があたりました。

発掘地点は、1971年の発掘地でもある塩くれ場と昨年からの大反（おおそり）地点で、出土資料総数は3.533点で、尖頭器13点、スクレイパー3点を含むものの大半は黒曜石製の砕片、剝片で



した。発掘の成果は次のとおりです。

1） 遺物密集区（ユニット）が大反地点から2ケ所。塩くれ場から5ケ所。存在が確認されました。

2） 遺物包含層（生活面）がデカパミ（凝石層。約13,000年前）から黒モヤ（約10000年前）までの8層準にみとめられました。

3） 2次にわたる調査で出土した尖頭器は、半両面加工で断面は三角形に近いAタイプ。両面加工で断面は厚く。加工が粗いBタイプ。両面加工で断面は凸レンズ形で加工が緻密なCタイプの3タイプに分類でき、層位的にA→B→Cの変遷がみとめられました。このような尖頭器の形態変化が一遺跡で層位的にとらえられた例は、きわめて少なく重要な成果だといえます。

4） 大反ア－20グリッドでは、尖頭器以外に使用された剥片。スクレイパー等が炉のまわりにちらばって出土しました。この出土状況は、この地点が一時的な石器製作場だっただけでなく、キャンプ地等の生活の場であったことを推定させます。

<参考>第1回発掘の報告書が出版されました。八千穂村教育委員会までお申込み下さい。
（550円送料含）

文責 中村 由克（野尻湖博物館）

後 記

本号は、日頃考えていることを多くの会員から原稿にしていただきました。一つのことに会員全員が参加をし、お互いに発展しあう学会づくり、仲間づくりをしたいと思います。（K・F）

発行所：佐久考古学会
長野県佐久市岩村田1040~7
木内 捷方（〒385）
TEL 026 78 0617
発行者：由井 茂也
編集者：井出正義（編集長） 高村・福島
森泉・小山・堤

佐久考古通信

No 33
1985, 3, 31
佐久考古学会

資料紹介特集

旅行記―みちのくの多賀城をたずねて――後編――（林　幸彦）…… 1
矢出川遺跡採集の細石刃石核二例　（由井茂也・堤　隆）…… 2
蓼科山北麓に於ける縄文中期初頭の様相　（福島邦男）…… 3
縄文土器を作る　（岩村田高校社会班　小山栄二）…… 4
野辺山の鉄鏃　（土屋忠芳）…… 5
事務局からのお知らせ …… 6
後　記 …… 6

旅行記　みちのくの多賀城をたづねて―後編―

林　幸彦

泉ICから途中ほとんど迷いもせず(?)、午後2時30分に東北歴史資料館に到着する。名高い資料館にしては、やや小ぶりの感を受ける。ホールで小山君の旧知の人「オンビンニ、オンビンニ」の石川氏と対面する。資料館の概要は宮城美人の学芸員に丁寧に説明して頂く（内心は時間を気にしながら）。展示品は文字が記されたもの（木簡やうるし塗の和紙）が多くみられ、また、須恵器なども優品があり、さすが東北の中心地である。多賀城に関係するもの以外では、知識不足のせいも多分にあるが、東北地方でも立派な埴輪や土師器があるのには驚いた。

隣接して所在するかの有名な多賀城碑を実見し、いよいよ政庁跡へと歩を進める。政庁跡はけっこう小高い場所を占地し、やはり広大なスケールであった。ただ、土塁の復元方法にもう一工夫欲しいし、礎石をコンクリート漬けにするのはいただけないと感じた。

午後5時、宿舎に到着。夜は恒例により無礼講となり、「オンビンニ」の石川氏の独壇場となった。2日目は運転手さんの好意により、朝まだきの五大堂と9C前半に創建された瑞巌寺を散策でき、皆なの気がかりなお土産を朝の魚市場で確保できた。こうして楽しく、やや眠かった、みちのく紀行から全員無事に7時佐久市役所着となった。……さらに、この研修旅行で特記すべきは、夜半というより、早朝まで「ワッハッハ、ワッハッハ」と大貧民がくり返され、更に帰途の車中でも続いたことである。

矢出川遺跡採集の細石刃石核二例

由井　茂也・堤　隆

昭和２８年春、矢出川遺跡での細石器の発見が契機となって、日本で初めて細石器文化というものが確認された。そしてその細石器文化は、全国的に研究者の関心を集め、新らしい研究の灯となったことは言うまでもない。

その矢出川の発見から間もなく、矢出川の細石刃石核とはまったく異質な舟底形石核と、特徴的な彫器を保持する細石器文化の存在が明らかになった。新潟県荒屋の細石器文化である。かってその荒屋の発見者である星野芳朗さんが、荒屋の石器をかかえて私（由井）を訪ねてきてくれた。私は、芹沢さん達から聞かされていた石器を眼の前にして、矢出川の石器との相違点などを星野さんと話し合ったりなどもした。

それからどれぐらい時を経たかは覚えていないが、矢出川を渡った南側（矢出川第Ⅳ地点遺跡）で、暗青灰色のチャートのコアを発見した（第１図１）また、夕立に洗われた矢出川第Ⅰ地点遺跡の下り坂で乳白色のコアを発見した。（第１図２）ともに、いわゆる半円錐形と言われる矢出川の細石刃石核とは異なり、その特異さが私の関心を呼び覚ました。

２　第１図１は、チャートの細石刃石核である。部厚い剥片を横長に用い、そのポジテイヴな主要剥離面を石核の打面として利用している（ｄ）石核の整形もこのｄ面からの剥離によるもので、相対する下縁からの剥離は僅かに認められるにすぎない。これらの整形によって石核の形態は舟底形を呈している。フルーテイングは石核の長軸上の一端（ｂ）においてなされており、頭部調整も顕著である。打面は、ほぼ均等に傾く均等打面で、その片側縁には調整痕も認められるが、これはフルーテイングに直接関連するものではないと思われる。打面角は７７°を測る。側面及び下縁の一部には自然面が残る。

第１図２は、珪質度の低いチャートを用いたもので、細石刃石核の原形と考えられる。その素材となっているのは部厚い剥片で、ポジテイヴな主要剥離面がｅ面にうかがえる。石核原形の整形は、細石刃剥離の際の打面ともなると思われるｅ面と、ｅ面に相対するｆ縁よりなされ、角錐状に仕上げられている。ｅ面は、前後左右ほぼ均等に傾き、ｂ面で８０°、ｄ面で７１°を測る。なお、ｂ面・ｄ面ではすでに細石刃剥離が行なわれ、現状は作業面再生のなされた状態であることも考えられる。

３　今回の２例のように、部厚い剥片を素材としその主要剥離面を加撃面として舟底形の細石刃石核原形を生み出す技法としては、ホロカ技法（安蒜　1979）があげられよう。当然、本資料２例もこのホロカ技法の範疇で理解できるものと考えられる。

ところで、このホロカ技法によって生み出される細石刃石核には、北海道・東北を中心とし

て東日本に分布のみられる幌加型石核（鶴丸 1979）と、九州・宮崎県船野遺跡等に代表される西日本を中心とした船野型石核（橘 1975）とがある。端的に言えば本2例は、南まわりの船野型の系統上に位置付けられるものである。その理由としては、本州における船野型石核はしばしば野岳・休場型石核（鈴木 1971）を伴なうこと（本資料の場合も矢出川遺跡に多量にみられる野岳・休場型細石刃石核と共伴するものと解釈できる）、本州中央における船野型石核は、その石材としてチャートを多用する傾向にあり本資料も同様であること、南回りの船野型石核は北回りの幌加型石核に比べると入念な調整による端整な舟底形が作り出されず、本資料も端整なそれとはいえないことがあげられよう。

さて、矢出川遺跡群における細石刃石核2例は、このように船野型として認識できるものである。そしてその存在は、神奈川県上草柳第1地点遺跡、同県下鶴間長掘遺跡などとともに、本州における船野型石核の分布の南限にあたるものとして捉えられよう。

蓼科山北麓に於ける縄文中期初頭の様相

福島　邦男

蓼科山北麓とは、北佐久郡の千曲川西方全体を指してもよいが、とりわけ、蓼科火山によって形成された雄大な裾野と、その間を流れる河川によって発達した狭長な谷平野と、さらに御牧原台地や八重原台地もその一角に含めることができる。

昭和50年度から、蓼科山の麓の望月町に於て継続的に発掘調査が実施され、特に縄文時代早期から晩期初頭の一連の資料が把握されるに至っている。そこで、良好な資料が増加しつつある縄文中期初頭の九兵衛尾根I・II式及び狢沢式土器について若干ふれてみたい。

九兵衛尾根I式土器は、後沖遺跡第7号住居址出土資料に代表される。第2図1は埋甕炉の土器で、頸部から口縁部にかけて受口のキャリパー状を成し、口縁に併行して隆帯を貼り巡らすが無文である。2・3は深鉢形土器の口縁部で、踊場式の影響を残す隆帯上の連続押引文や三角連続刻文が施文されている。しかし、4・5の頸下半には、半裁竹管による区画文によりY字文的傾向が強くなり、縄文が多用されるなど九兵衛尾根式式の要素もみられるものである。

九兵衛尾根II式土器は、後沖遺跡第18号住居址出土（7～9）及び第23号土坑出土（6）竹之城原遺跡第23号土坑出土（10）資料に代表される。6は口縁部が波状で外反し、箆畑式の特徴を残し、九兵衛尾根I～II式にかかるものである。8は埋甕炉の小型土器で、口縁は半円の連続文でI式の特徴を残すが、頸部にはY字文が発達し、地文に単節斜縄を施文するなどII式の前半の特徴を示すものである。10は口縁に突起が付いて外反し、地文に単節斜縄文を施文した後、隆帯により三角区画文を描いている。その中に、渦巻を基調とする玉抱き三

叉文が施文されている。

猿沢式土器は、後沖遺跡第２１号住居址出土（11・12）、第78号土　出土（14）を代表とする。１１は小型深鉢形土器で、口縁部に角押文がみられる。１２は口縁がラッパ状に外反し、人面様の突起が４箇所に貼付されている。器面全体に輪積み整形痕が顕著である。１４は大人一人が入る程の極めて大型の土器で、口縁直下と胴部に文様帯をもっており、胴部下半に輪積み整形痕がみられる。１３は北陸系の上山田第Ⅲ様式に比定され、２１住１１・１２と共伴関係をもって出土したものである。口縁部の二段に及ぶ蓮華文と新崎式から系譜をもつ特有の区画文が特徴である。

ここに紹介した資料は、全体の中の僅かなものであるが、千曲川水系では、断片的には各所にみられるが、集落構成による遺構から出土した資料はここにしかない。これらの様相は、蓼科山西南麓及び八ケ岳南麓地域と直接的なつながりを示すものであり、全く同様の文化が本地に定着したとみてよい。なお言うなら、蓼科山を越えた地域であっても、同一の文化圏として把握してもよいと思われる。

縄　文　土　器　を　作　る

岩村田高校社会班　　小山　栄次

近年、高校の文化班の活動は文化祭中心であり、またそれが終ってしまうと、活動はほとんどしないのが実情です。それは社会班でも同じことがいえ、班に対する班員の意気込みや、関心が、次第に薄れていく一方であり、今年で２年目の班長を務める自分としては、今年は例年とは違った、班員一人一人が興味をもってやっていけるような、活動をしていかなければならないと考えていました。

そのような時、ふと思いついたのが、「縄文式土器でも作ってみるか」という安易な考えでした。しかしこれは、充分に楽しめて、しかも土器の名称や用途、構造などが自然に理解でき、これまであまり考古学に関心をもっていなかった班員も、これはおもしろそうだと、新めて関もってくれるのではないかと考えるようになり、夏休みの発掘と併行して、土器の製作を行なっていくことにしました。

まず粘土の選択。どうせ作るのならば、天然の粘土を使いたいと考え、佐久市前山より粘土を採取してきました。しかし、これには不純物が多く含まれているのと、粘りがないためすぐにひび割れが生じてしまうので、仕方なく市販されている粘土を使うことにしました。

土器の作り方は、まず土台となる底部を、形がくずれないようにしっかり作っておき、その上に粘土の輪を、いくつか重ねて継ぎ合わせ、大体の形を造り、そこから時間をかけて整形していき、最後に縄などで模様をつけ仕上げる。とまあ実際は文章で表現する程、うまくいくは

ずがなく、最初は火焔土器を作ろうと思っていましたが、すぐこわれてしまい、縄文人は本当に器用だったんだなあと感じました。

なんとか土器は出来上がり、それを3週間程日影干しをした後、いよいよ焼成、早朝から昼まで、土器を焼くための熾をつくり、まず試験的に土器を数個入れてみる。するとたちまち土器は破裂してしまいました。これは急に高温のところに入れてしまったためだとわかり、気を取り直し今度は、温度が約200°Cになったところで、土器を入れると前のように破裂しなかっかったので、この調子で翌日の朝まで焼くことにした。

翌日さっそく取り出してみると、だいたい4割ちかく割れたり、ひびが入ったものの、なんとか焼き上げることができて、ほっとした。

粘土の採取から、土器の焼成まで失敗の連続でしたが、それによって古代の人々の知恵や、芸術的な才能を知ることができました。

今後の課題は

0天然の粘土を使って作る。

0土器が割れにくいように、砂や草などの繊維質のものを混ぜてみる。

0完成した土器で、いろいろな実験をやってみる。

という事です。

野　辺　山　の　鉄　鏃

土屋　忠芳

私の住む矢出原の地名は、徳川初期ここに三軒茶屋が出来た時、すでにこの地名が使われており、記録としては、天文十一年村上義清の連合軍と武田信玄が平沢に於て戦ったと記されている。激戦の跡と思われ鉄鏃が沢山落ちていたのがこの名の由来と思います。

ここで発見されて、現在収録されている鉄鏃は、99、刀6、古銭70、不明6であります。

鉄鏃の最大のものは、雁又で巾14cm、重さ50gあり、尖頭形54、雁又40で地域は海ノ口の市場から平沢峠にまで及んでいますが、何といっても私の住居の付近に集中しています。

恐らく、丸山或は平沢峠が最も激戦地であったと思われます。

若し、最初から考古学の採集の様に注意深く凡て記録して採集されたなら、当時の戦場の模様をいささか知る事が出来、また現在に数倍する資料が遺されたでありましょう。

野辺山の鉄鏃は、矢出川遺跡と共に多くを語る非常に興味深いものであります。

以上の鉄鏃は、保存処理を施した後、学校、個人宅等に保管されています。採集場所、所蔵者、資料の実測図、写真等の詳細は、雑誌『佐久』46号、昭和56年6月に記載してあります。ご一読下さい。

～～

今後、資料紹介特集は年1度発行したいと考えています。

事務局からのお知らせ

○ 佐久平の原始・古代学関係の文献情報をお寄せ下さい。

昭和５９年に佐久考古学会員が執筆した報告書・雑誌等の文献、及び会員以外でも佐久平について取扱った文献を御存知の方は、事務局までお知らせ下さい。「佐久平古代史　文献解題」（仮称）を作成したいと考えています。

○ 例会について　＜次回は、４月１３日（土）に小山会員による「縄文の施文実習」の予定です＞

弥生時代の基礎講座は、第３回５９年９月８日に林会員による弥生後期、第４回１０月１３日に高村会員による総括（１）「赤色塗彩土器文化圏の提唱」、第５回昭和６０年３月９日に白田会員による総括（２）「土器編年の再検討」が行われ、熱のこもった討論が交されました。また、59年１０月２日には、林会員の紀行にもあるように多賀城への研修旅行、６０年１月１３日には臨時総会及び新年会が佐久ホテルにて開催され、会費値上げと会則変更について話し合われました。

○ 佐久考古通信№１～№３０合冊製本事業について

佐久考古学会発足１５周年記念として行われている佐久考古通信の合冊製本事業は、３月９日の例会において作業をほぼ完了し、４月の刊行を待つばかりとなりました。例会の後は、埋文資料室２階にて、記念パーティが催され、１５年間の想い出話しに花を咲かせました。

○ 新入会員

宮下健司、掛川祐司、三石宗一、佐々木春蔵、吉沢袈裟衛、岩井福太、浅沼　馨　氏の７名が５９年度に入会されました。今後とも大きな輪をつくっていきましょう。

○ 通信№３２号の訂正　５ページ後段下から６行目「小学生以下の」→「小学生以上の」

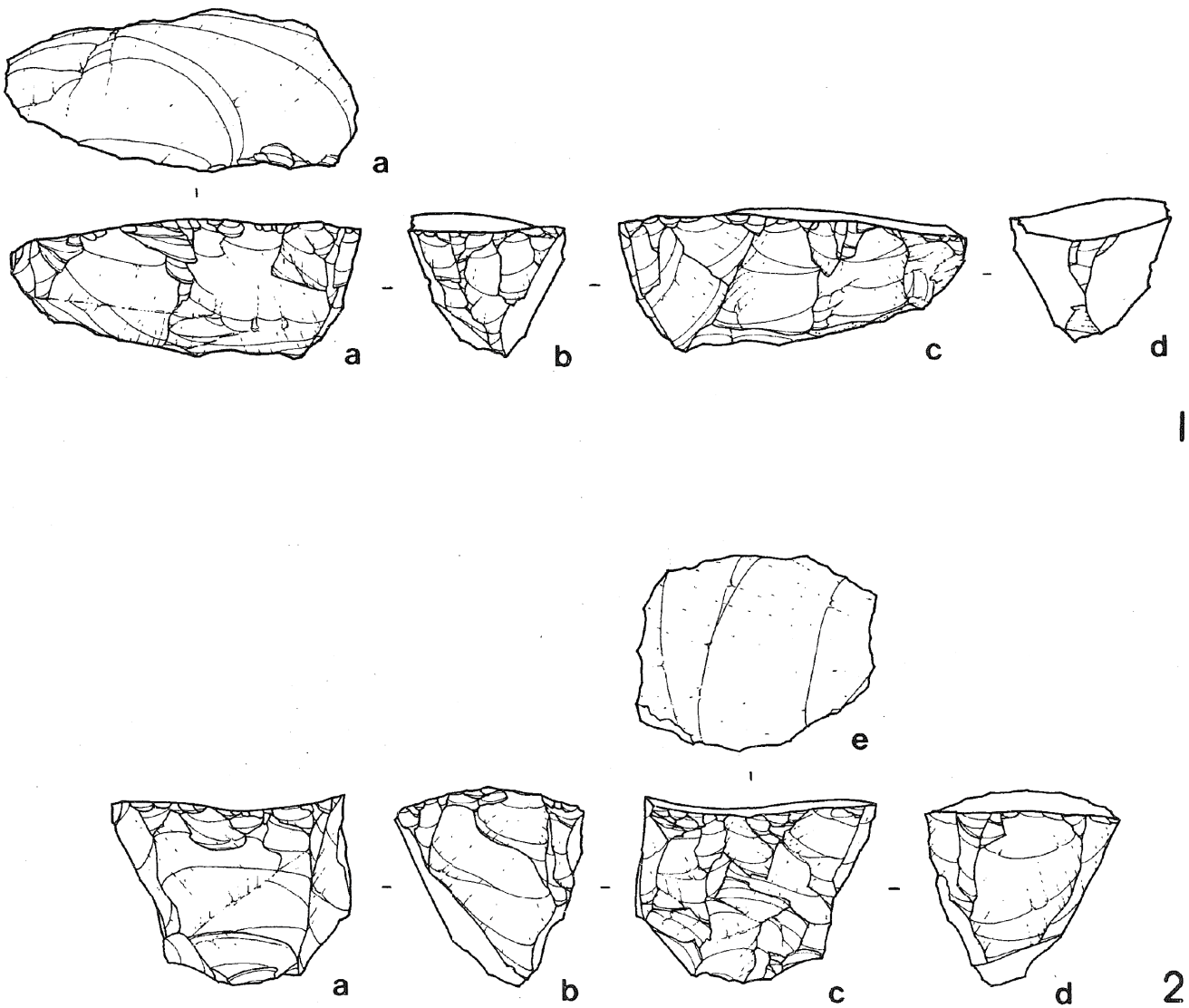
＊＊

後　記

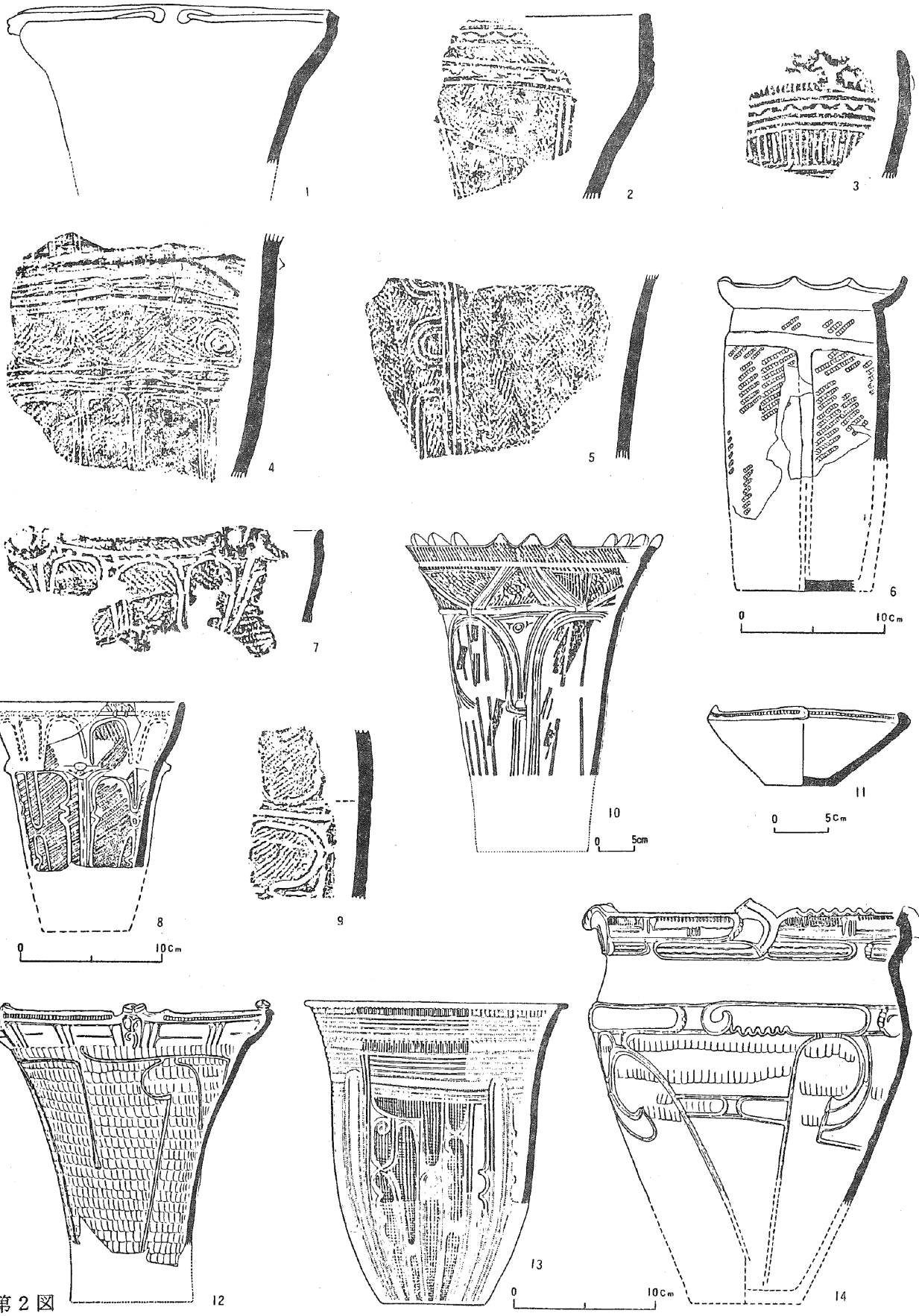
本号は、日頃の研究成果を発表して頂こうと「資料紹介特集」を企画しました。それぞれに力作揃いですが、特に２年間に渡って岩高社会班の班長を務め、地道な研究活動を続けた小山栄二君の「縄文土器を作る」には拍手を送りたいと思います。

ピカピカの新しい季節が近づいています。本年度も皆で頑張りましょう。（Ｔ・Ｋ）

佐久考古通信№33号
発行所：佐久考古学会
長野県佐久市岩村田1040~7
木内　捷方（〒385）
TEL 0267 68 0617
発行者：由井　茂也
編集者：井出正義（編集長）　高村　福島
森泉　小山　堤



第1図　矢出川遺跡採集細石刃石核



第２図　後沖遺跡７住(1～5)、18住(7～9)、23土坑 (6)、18住(7～9)、21住(11 ～13) 78土坑(14)、竹之城原遺跡23土坑(10)

佐久考古通信

№３４号
１９８５，５，２０
佐久考古学会

昭和６０年度佐久考古学会総会次第

日時　昭和６０年５月２６日（日）午後２時～

場所　佐久市役所８階大会議室

1. 開会のことば
2. 会長あいさつ
3. 日程説明
4. 議長選出
5. 議事

第１号議案　昭和５９年度佐久考古学会会務・決算・会計監査報告及び承認の件

第２号議案　昭和６０年度佐久考古学会事業計画承認の件

１）一般事業計画

２）特別企画「佐久考古学会１５周年記念祝典」計画

３）佐久考古学会シンボルマーク募集の件

第３号議案　昭和６０年度佐久考古学会特別会費について

第４号議案　昭和６０年度佐久考古学会会計予算承認の件

１）一般会計

２）佐久考古学会１５周年記念祝典特別会計

6. その他

＊講演会　「野火付遺跡の歴史時代の様相」　講師　堤　隆　（御代田町教委職員）

※　講演会終了後、佐久市役所食堂にて懇親会（会費1,500円）を計画しています。お車での御参加は御遠慮下さい。

昭和５９年度佐久考古学会会務報告

1 会務の経緯

昭和５９年（１９８４）

６月９日＜総会＞浅間会館にて昭和５９年度総会を開催し、役員の改選を行う。
＜講演会＞総会の後、岡谷市教育委員会高林重水講師による「橋原遺跡の調査報告―弥生式土器を中心として―」と題する講演を行う。
＜懇親会＞講演会の後、佐久ホテルにて親交を深める。

６月３０日＜事務局幹事会＞埋文資料室にて幹事の役割りを中心に話し合う。

７月１４日＜例会＞埋文資料室にて花岡会員による弥生基礎講座第１回「弥生前期の土器について」を行う。

８月１１日＜例会＞埋文資料室にて小山岳夫会員に弥生基礎講座第２回「弥生中期の土器について」を行なう。
＜保存運動＞尚、矢出川遺跡群保存対策小委員会もあわせて行う。

８月１５日＜通信＞「佐久考古通信№31」を発行する。

９月　８日＜役員会＞埋文資料室にて、研修旅行と佐久考古通信№30までの合冊製本事業を中心に話し合う。
＜例会＞役員会に引き続いて林会員による弥生基礎講座第３回「弥生後期の土器について」を行う。

９月１２日＜保存運動＞黒岩氏宅にて、矢出川遺跡群保存対策小委員会を行う。

９月１３日＜編集会議＞井出編集長宅にて、佐久考古通信№32の編集会議を行う。

９月１８日　川上村教育委員会にて三沢地区埋蔵文化財の件について話し合う。

１０月２日～１０月３日　＜研修旅行＞「みちのく多賀城を訪ねて」の研修旅行を行う。

１０月６日＜保存運動＞文化庁調査技官の矢出川遺跡群視察に備え、資料集の作成作業を行う。

１０月11日～１０月12日　文化庁調査技官が矢出＜保存運動＞川遺跡群を視察する。

１０月13日＜例会＞埋文資料室にて高村会員による弥生基礎講座第４回「赤色塗彩土器をめぐり」を行う。

１０月22日　川上村教育委員会にて、三沢遺跡関係について県文化課指導主事小林孚氏を交じえて話し合う。

１０月27日　野辺山社会体育館にて展示会の準備を行う。

１０月28日＜展示会＞「野辺山の自然と遺跡を知ろう」展及び「野辺山高原の自然と遺跡を考える集い」を行う。

１１月12日　佐久考古学会会員名簿を作成する。会員数４７名と１団体。

１１月19日＜事務局幹事会＞佐久考古学会１５周年記念事業である通信№１～30合冊製本の関係を話し合う。

１１月24日　　戸倉町観光会館にて三県シ
＜例会＞ンポジウムが開かれ、当会としては１１月例会として
１１月25日　　取り組む。

１２月１日＜通信＞「佐久考古通信№32」を発行する。

１２月15日＜役員会＞埋文資料室にて佐久考古学会１５周年記念事業（佐久考古通信№１～３０合冊）の件と川上村三沢地区レジャーランド開発に伴う埋蔵文化財の調査についてを中心に話し合い、臨時総会の日程を決定する。

＜忘年会＞役員会の後、佐久市丸万食堂にて忘年会を行う。

１２月20日　川上村教育委員会にて三沢地区埋蔵文化財の件につき話し合う。

昭和６０年（１９８５）

１月５日　埋文資料室にて、川上村三沢遺跡群確認調査についての打ち合せを行う。

１月１０日＜編集会議＞井出編集長宅にて佐久考古通信№３３の編集会議を行う。

１月１３日＜総会＞佐久ホテルにて会費2000円から3.000円に値上げの件、会則改正の件を中心に臨時総会を行う。

＜新年会＞総会の後、会場にて新年会を行う。

１月１４日～１月１５日　川上村三沢遺跡群確認調査の結団式及び調査のため川上村教委に行ったが、開発業者の都合により中止となる。

２月　９日＜役員会＞埋文資料室にて佐久市埋蔵文化財保護行政の強化に関する請願及び陳情の件を中心に話し合う。

２月２３日～２月２４日　茅野市臼田会員宅にて佐久考古学会１５周年記念事業―通信№１～３０合冊―のための印刷及びとじこみ作業を行う。

３月　９日＜例会＞埋文資料室にて、１５周年記念事業の通信№１～３０合冊作業を行い、製本屋に引き渡すだけとなる。また佐久市埋蔵文化財保護行政の強化に感する請願及び陳情の結果について報告があり、そのことを中心に話し合う。最後に臼田会員による弥生基礎講座第５回「赤い土器を追おうの総括(二)」を行う。

＜懇親会＞例会の後、その場にて懇親会を行い、親交を深める。

４月１３日＜例会＞埋文資料室にて、佐久埋蔵文化財調査センター設立についての報告等があり、その後、小山会員による「縄文の施文方法について」の学習会を行う。

＜懇親会＞例会の後、その場にて懇親会を行い親交を深める。

4月22日<役員会>埋文資料室にて、昭和60年度佐久考古学会総会の日程等を決定し、川上村三沢遺跡群確認調査の件も話し合う。

2　会務別事業数

(1)総会……2、(2)役員会……4、(3)例会……7
(4)通信……3（№31～33）、(5)研修旅行……1（みちのくの多賀城を訪ねて）、(6)講演会…1
(7)保存運動……4（矢出川遺跡群関係）、(8)展示会……1（野辺山高原の自然と遺跡を知ろう
(9)事務局幹事会及び編集会議……6、(10)懇親会（忘・新年会も含む）……6、(11)特別企画……1（佐久考古学会15周年記念事業一佐久考古通信№1～30合冊一）

昭和60年度佐久考古学会事業計画（案）

1. 事業別計画（予定）

項目	日時	場所	内容	回数
総会	5月26日(日)	佐久市役所	昭和60年度総会	1
例会	毎月第2土曜日午後2時から	佐久埋文センター	「赤い土器を追おう」の編集会議を主に	
	6月 8日(土)	〃		
	7月13日(土)	〃		
	8月	〃	お盆のため計画なし	
	9月	〃	研修旅行にふりかえ	
	10月	〃	特別企画「佐久考古学会15周年記念祝典にふりかえ	
	11月 9日(土)	〃		
	12月14日(土)	〃	忘年会もあわせて	
	S61年			
	1月25日(土)	〃	新年会もあわせて	
	2月 8日(土)	〃		
	3月 8日(土)	〃		
	4月12日(土)	〃		
	5月	〃	総会準備のため計画なし	
役員会	随時	——	——	
通信	5月20日	——	№34	4
	6月30日		№35	

通信	11月 1日 2月 1日		№36 №37	
研修旅行	9月22日(日) 〜 9月23日(月)	千葉方面	芝山埴輪館 佐倉市国立歴史民俗博物館	1
講演会	5月26日(日)	佐久市役所	「野火付遺跡の歴史時代の様相」	1
保存運動	随時		矢出川遺跡群に関して	
会議	随時		事務局幹事会・編集会議等	
特別企画	10月12日(土)		佐久考古学会15周年記念祝典	1
研究報告	佐久考古学会研究報告書第1集の発刊準備			

2. 年月日順事業予定

5月15日（水）　佐久考古通信№34の発行

5月26日（土）　佐久市役所にて総会・講演会

6月 8日（土）　佐久埋文センターにて例会

6月30日（日）　佐久考古通信№35の発行

7月13日（土）　佐久埋文センターにて例会

9月22日（日）
〜　　千葉方面へ研修旅行
9月23日（月）祝日

10月12日（土）　特別企画「佐久考古学会15周年記念祝典」

11月 1日（金）　佐久考古通信№36の発行

11月 9日（土）　佐久埋文センターにて例会

12月14日（土）　〃　・後忘年会

昭和61年（1986）

1月25日（土）　例会及び新年会

2月 1日（土）　佐久考古通信№37の発行

2月 8日（土）　佐久埋文センターにて例会

3月 8日（土）　〃

4月12日（土）　〃

※　例会は、変更の時のみハガキにて連絡します。

特別企画「佐久考古学会15周年記念祝典」計画(案)

日時　昭和60年10月12日㈯午後2時～

場所　佐久市役所

1　名称「佐久の古代を語るつどい」

2　事業企画

第一部　祝典

○これまでの歩み、○シンボルマークの発表等

第二部　記念講演会　(講師2人を予定)

第三部　宴　会

3　実行委員会

委員長　由井茂也

委　員　木内　捷、井出正義、臼田武正
林　幸彦、福島邦男、高村博文
島田恵子、花岡　弘、小山岳夫
堤　　隆、三石宗一、森泉かよ子

4　会　場

第一・第二部　佐久市役所8階大会議室

第三部　〃　食堂

佐久考古学会シンボルマークの募集について(案)

1. 目的　佐久考古学会が15周年を迎え学会にふさわしいシンボルマークを作り、学会の象徴として通信・会誌等の刊行物に使用するため。
2. 募集期間　6月30～8月15日(予定)
3. 賞　金　1万円
4. 選考委員会　役員会をもってする。
5. 募集方法　佐久考古通信No.35により会員より募集する。

昭和60年度特別会費について(案)

本年度に限り、特別企画「佐久考古学会15周年記念祝典」の事業費へ補助するため、本来の会費3,000円に1,000円加算し、4,000円とする。

昭和59年度会計決算報告

収入の部　　単位円

項目		本年度予算額	本年度決算額	比較	説明
1 繰越金	1）繰越金	34.297	34.297	0	
2 会費	1）会費	60.000	134.000	74.000	46人他滞納分
3 委託料	1）委託料	0	0	0	
4 会報売上金	1）会報売上金	0	0	0	
5 寄付金	1）補助金	0	0	0	
	2）寄付金	0	0	0	
6 雑入	1）雑入	5.703	960	△ 4.743	
合計		100.000	169.257	69.257	

支出の部

項目		本年度予算額	本年度決算額	比較	説明
1 報酬	1）謝礼	20.000	10.000	△10.000	講師謝礼
2 需要費	1）印刷費	20.000	32.770	12.770	通信3回他
	2）消耗品費	5.000	5.140	140	ノート他
	3）食料費	10.000	35.830	25.830	会議賄費
3 役務費	1）通信費	20.000	21.180	1.180	郵送料他
4 事務局費	1）事務局費	15.000	11.331	△ 3.669	例会茶菓子他
5 慶弔費	1）慶弔費	10.000	7.930	△ 2.070	お見舞，電報
6 予備費	1）予備費	0	0	0	
7 繰越金	1）繰越金	0	45.076	45.076	
合計		100.000	169.257	69.257	

以上の通り相違ないことを認めます　　会計監査　井上行雄 ㊞　由井 明 ㊞

昭和60年度会計予算（案）

収入の部　　単位円

項目		本年度予算額	前年度予算額	比較	説明
1 繰越金	1）繰越金	45.076	34.297	10.779	
2 会費	1）会費	206.500	60.000	146.500	51人×3.000 1団体 1.000 52人×1.000
3 書籍売上金	1）書籍売上金	25.000	0	25.000	
4 雑入	1）雑入	3.424	5.703	△ 2.279	
合計		280.000	100.000	180.000	

支出の部

項目		本年度予算額	前年度予算額	比較	説明
1 報酬	1）謝礼	5.000	20.000	△15.000	講師謝礼
2 需要費	1）印刷費	40.000	20.000	20.000	通信4回他
	2）消耗品費	20.000	5.000	15.000	印鑑、封筒他
	3）食料費	40.000	10.000	10.000	会議賄他
3 通信費	1）通信費	30.000	20.000	10.000	郵送料他
4 事務局費	1）事務局費	25.000	15.000	5.000	例会諸雑費他
5 慶弔費	1）慶弔費	10.000	10.000	0	
6 繰出金	1）繰出金	110.000	0	110.000	15周年へ
7 繰越金	1）繰越金	0	0	0	
合計		280.000	100.000	180.000	

佐久考古学会15周年記念祝典特別会計（案）

1　収　入

項　目	予　算	説　明
1. 会　費	250.000	2.500円×100人＝250.000
2. 繰入金	102.000	佐久考古学会60年度会計より繰出金
3. 雑　入	148.000	200円×500＝100.000（絵ハガキ）　その他
合　計	500.000	

2　支　出

項　目		予　算	説　明
1 報　酬		100.000	記念講演講師謝礼
2 賞　金		10.000	シンボルマーク賞金
3 需要費	1）印刷費	10.000	案内状印刷代等
	2）消耗品費	10.000	封筒他
	3）食料費	220.000	宴会費2.000円×100人＝200.000　その他 20.000
4 通信費		60.000	案内状他60円×500人＝30.000　電話他 40円×500人＝20.000
5 記念品費		80.000	記念絵ハガキ 40円×4枚×500部＝80.000
6 予備費		10.000	
合　計		500.000	

佐久考古通信№34号

発行所：佐久考古学会

長野県佐久市岩村田1040~7

木内　捷方（〒385）

TEL 0267　68　0617

発行者：由井　茂也

編集者：井出正義（編集長）　高村・福島

森泉・小山・堤

佐久考古通信

No. 35
1985, 10, 1
佐久考古学会

###############
昭和59年度発掘調査年報・昭和60年度発掘調査速報特集
################

※昭和60年度総会報告　（臼田武正）………1
※昭和59年度発掘調査年報
大井城（黒岩城）址の調査　（小山岳夫）………2
戸坂遺跡の第2次調査　（小山岳夫）………3
佐久市円正防遺跡　（島田恵子）………4
蛇塚B遺跡群野馬久保遺跡　（林　幸彦）………4
佐久町後平遺跡　（島田恵子）………5
雨堤遺跡　（井出正義）………5
※昭和60年度発掘調査速報
青銅の釧が出土した上直路遺跡　（林　幸彦）………6
北西久保遺跡第二次調査　（三石宗一）………7
川上村三沢遺跡　（島田恵子）………7
鋳師屋遺跡群前田遺跡　（堤　隆）………8
後　記………10
附　図

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

昭和60年度総会報告

臼田武正

昭和60年度佐久考古学会総会は、5月26日（日）午後、佐久市役所で開催された。自宅療養中の由井会長に代って、黒岩副会長のあいさつの後、議長に臼田武正を選出し、議事を進行、第1号議案では、事務局より59年度会務・会計報告、由井明監査員からは監査報告があり、異議なく承認された。

事業計画に関する第2号議案は、例会、佐久考古通信の発行・研修旅行・矢出川遺跡の保存運動等の一般事業計画とともに、特別企画として佐久考古学会15周年記念祝典の計画が提案され、審議の中で、記念品については佐久の原

始古代を象徴する出土品の絵はがきを発行すること、さらに学会のシンボルマークについては、会員以外にも広く一般から募集することが確認され、例年になく中身の濃い６０年度事業計画が承認された。

続いて第３号議案は、特別企画の事業費へ補助するため今年度に限つて会費3,000円を4,000円にしたい旨の説明があり、賛成を得た。

予算に関する第４号議案は、一般会計と記念祝典特別会計の予算案が提示され、万場一致で承認された。

総会を通して思うことは、佐久考古学会創立１５周年という記念すべき今年度の学会活動が順調に運営されるためには、会員ひとりひとりの自覚の上に立つた協力体制づくりが今こそ必要であり、目指されなければならないということである。

議事終了後の講演会では、御代田町教育委員会の堤隆氏を講師に「野火付遺跡の歴史時代の様相」と題して、発掘調査の成果から考察されることをスライドを使つて具体的に説明していただいた。調査は今年度も継続されることになつており、古代御牧との関連も含めて、遺跡の性格はより一層鮮明になるものと期待される。

大井城（黒岩城）址の調査

小山岳夫

大井城址は佐久市岩村田に所在し、湯川の左岸、標高710m内外の切り立つた台地上に占地している。昭和５９年度の小集落地区対策事業に際して県史跡指定が一部解除されることになり、昭和59年５月～昭和６０年１月の長期間にわたつて緊急調査が実施された。

大井城址は鎌倉～室町時代に存続したと文献に記されており、北から石並城、王城、黒岩城の三城からなつている。今回は、黒岩城の南端部約3500㎡と台地下の水田が調査された。検出された遺構は以下のとおりである。

弥生時代	土壙	1基
古墳時代後期	住居址	15軒
時期不明	掘立柱建物址	3棟
	水田址	
中～近世	竪穴状遺構	54基
	土壙	288基
	溝状遺構	2基

中世と考えられる遺構では特に竪穴状遺構が注目される。台地上に広く分布しており、平面形態は、方形か長方形を呈している。規模は一辺1.5ｍ内外の小型のものから一辺４ｍを超える大型のものまで様々であるが、確認面からの壁高は70～80cmを測る例が多く、一様に深い掘り込みをもつ傾向にある。また、壁外に入口施設と考えられる張り出し部を有するものや、壁下に小規模な柱穴が規則的に配列（一辺に４～１２個）される例も数多くみられることから、

この遺構が建物址であることが想定できる。

遺物は内耳の土鍋、土師質の小皿（かわらけ）、輸入陶磁、国産陶器のほか、鉄、青銅製品、石臼、茶臼、礎石等が多量に出土しており、陶磁器類の分析を行えば、今まで不明瞭であつた当地方の土師やかわらけの年代が明らかにできると思われる。

土壙は23基検出され、約半数が方形を呈している。性格については不明な点が多いが、建物址と考えられるものもある。円形を呈する土壙は、直径的な要素が強く、配石されたものもみられる。出土遺物は竪穴状遺構とほぼ同様であるが、人・獣骨が検出される例も多くみられる。

古墳時代後期の住居址は、ほとんどが近接した時期に構築されたものと考えられ、当時の集落構成を考える上での好資料である。出土遺物も豊富で、特にH2号住居址（焼失住居址）からは、土師器甕・坏・高坏・鍋・須恵器壷・坏等多量の完存品のセットが出土している。

最後に竪穴状遺構の性格についてふれておきたい。中世の竪穴状遺構は、東日本各地の城跡・館跡に関る遺跡で数多くの出土例をみているが、その性格については、住居址・地下倉庫・厩等意見が様々に分かれており、明確な位置付けはなされていない。調査団では今後この問題を建物址の分野から詳細に検討し、究明したいと考えている。それが不明の点の多い大井城址の城郭構造を明らかにする端緒となるものではないだろうか。

戸坂遺跡の第2次調査

小山善夫

佐久市新子田に所在する戸坂遺跡は、縄文・弥生・古墳・奈良・平安の各時代にまたがる志賀川流域では最大級の遺跡として古くから知られてきた。昭和47年にはその一部が調査され、平安時代を中心とした住居跡群とそれに伴なう多量の須恵土器が出土したことは記憶に新しい。

今回、調査されたのは遺跡群中では南西端にあたる標高710m内外の侵蝕崖の縁辺である。

検出された遺構は以下のとおりである。

住居址	縄文時代中期後半	2棟
	平安時代	3棟
円形周溝	弥生時代後期	1基
特殊遺構	〃	1基
土壙	弥生時代後期	1基
	時代不明	12基

この中で円形周溝遺構について説明しておきたい。円形周溝遺構は全体の約1/4が調査され、検出長39.5m、溝巾1.4~2.7m、深さは1m内外を測る。溝の断面形はおおむねV字状を呈している。また、周溝の内側からは土壙が11基検出されているが住居址はみられない。

出土遺物はすべて弥生時代後期の土器で完存品が多く、ほとんどが横転した状態で出土しているが、甕と高坏を組み合せた蓋付甕棺は正位の状態で検出された。内訳は壷1点、小型壷2点、無頸壷1点、深鉢1点、甕7点、高坏2点

である。性格は決定しかねているが、環状であるとしても極めて特異な例と言えよう。

佐久市円正坊遺跡

島田恵子

円正坊遺跡群は、岩村田駅から南西に広がる遺跡群で、この内小海線添いの西北端、清水田遺跡が昭和53年に調査されている。今回調査した区域は岩村田駅北側隣接地の道路公団事務所建設地で破壊を余儀なくされた約400㎡の範囲を11月25日～12月10日にわたつて調査した。検出した遺構は、古墳時代後期住居址6棟、土壙17基、円形周溝墓1、その他周溝墓の可能性がある円形周溝墓5を発掘した。住居址2棟は、3m×8m、9m50×9mを測り、たたみ40畳敷の大形住居址である。これ等の古墳時代・住居址は円形周溝墓を切つており、周溝墓は古墳時代後期以前の所産であることが判明した。多量の埴輪類が出土した北西久保遺跡の円形周溝墓との関連が考えられ、古墳変遷究明の上で大きな示唆が与えられた。

蛇塚B遺跡群野馬久保遺跡

林　部　均

今回の調査地点は、蛇塚B遺跡第1・2次調査が行なわれた県営住宅用地と県道香坂・中込線を挟んで相対していた。(株)サンエス電子工場新築工事に伴う緊急発掘調査である。

数軒の住居址が確認されたが、完全に全容を調査なし得たのはわずか2軒であつた。いずれも平安時代の住居址である。

1号住はベッド状遺構が付設され、多量の土器が出土した。東西580cm、南北590cmの隅丸方形で主軸方向はS82°Eを示す。焼失住居であり炭化材が住居西半分を中心に検出された。カマドは、南壁からわずか90cm離れた東壁に構築されていた。

ベッド状遺構は、北西コーナーから北壁に沿つて検出され、茶褐色土の上部に黄色砂質土が貼られていた。東西390cm、南北180cm、長方形を呈し、床面から15cmを測る。ベッド上の北西コーナーから、鎌一個の大形台付鉢が正位で出土した。

出土遺物は、焼失住居ということもあつてか実に多量であつた。土師器、須恵器、灰釉陶器は坏が大半を占める。特筆されるのは、鎌一個の大形台付鉢で、口径23cm、高台径15cm、器高14cmを測る。坏部・台部ともロクロナデ、坏部内面は口縁端部を除いて黒色処理されている。他に墨書土器、鉄製紡錘車、刀子、銅製品、ひめグルミの種子などが出土した。

佐久町後平遺跡

鳥田恵子

後平遺跡は、佐久町大日向下川原に所在し、抜井川の左岸緩傾斜の台地に位置している。遺跡の西側には館の大遺跡群が近接している。

本遺跡は、過疎対策による「農林地一体開発整備パイロット事業」計画があり、破壊が予想されるため昭和59年10月5日～16日にかけて約4,000㎡の範囲に試掘調査を行つた。

後平遺跡は、地元の高見沢今朝雄氏が中学時代（30年前）に発見した遺跡で、昭和53年に実施した佐久町遺跡詳細分布調査によつて新に登録された。当初より、黒曜石・チャートを素材とした石匙・石鏃類が多数採集されていたが、土器の採集は皆無であつたため、石鏃の形状から縄文早期であろうと予想はしていたが、正確な時期は不明であつた。しかし、今回の試掘調査によつて「田戸系の沈線文土器」、「鵜が島系の条痕文土器」および住居址とおもわれる遺構5、土広34基が確認され、時期も決定的となつた。住居址の規模は4mを測るものが2棟、3m50cmを測るものが3棟で、土広は1m～2m50cm前後を測る。この内、2基の土広に掘り下を試みた結果、深さ50cm～80cmを測るかなりしつかりした土広が顕現した。覆土中からは、黒曜石の剥片を中心に若干の土器も出土している。縄文時代早期の遺構は、竪穴住居址がほとんど確認されておらず、一時的なキャンプ地として理解されている。しかし、本遺跡は住居址的な遺構も確認されており、また県下でも調査例が少ないため本調査によつてその解明が期待される。トレンチによつての試掘で全体に及んでいないため、遺構はさらに倍増するものと思われるが、パイロット事業の予算が10年計画で補助されるため、本調査の計画も未定である。

雨堤遺跡

井出正義

所在地　小海町小海原雨堤

立地　千曲川と相木川に挟まれた標高1,100mの台地上にあり、西方千曲川の谷を隔てて松原湖、八那池原の台地と相対している。

周辺の遺跡　本遺跡に接続して南方山麓では縄文中期の土器・石器を出土する。東方800mには縄文前期から中期にわたる土橋遺跡がある。又約1,000m小海町井沢ゴルフ場内では、平安時代の鍔釜等を出土している。小海原は戦後千曲川畔から電力で揚水して開田したがその際雨堤地籍からは、石鏃・打石斧・土師器等が出土し、「野」の墨書土器が発見されている。

発掘調査の経廻　1984年9月10日、地主津金伝六氏が耕作中、石（カマド）と土器を発見して小海町教育委員会に報告し、町教委

が発掘調査した。

発掘調査期間　9月17日～26日の間で7日間

調査者　島田、三石、佐藤、白倉、沖浦、井出、外小検町文化財調査委員等

検出された遺構

住居址　1、450cm×470cm隅丸・方形

柱穴4（1は不明確）　周溝　西南隅

カマド、東壁中央、石組粘土、支柱石あり

消失痕跡、床面北半部に炭化材（梁）

ピット、西南隅80×40、深さ30

川原石1　25×30　床面中央南よりに据えられ、そばに鉄製刀子が置かれていた

遺物

土師器、甕、坏、椀、内面黒色、糸切、高台付、墨書土器3（文字不詳）、籾痕のついた土器1点。甲斐型坏　器壁薄く、赤褐色、緻密で光沢あり、花弁放射状暗文あり

須恵器、甕、椀、坏、糸切底

灰釉陶器、坏口縁部小破片2

石器　軽石製円盤形1、中央に偏して一孔

鉄器　刀子1、長さ13cm

炭化材、樹種未定

平安時代南佐久郡南部の1,100mの台地上に居住していた人々の生活と文化を知る上に極めて貴重な遺跡である。平安時代の高地集落の発掘調査は川上村横尾遺跡についで、南佐久郡では第二例目である。

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

昭和60年度発掘調査速報

青銅の釧が出土した上直路遺跡

林　幸彦

佐久市岩村田の枇杷坂遺跡群上直路（かみすぐじ）遺跡は、佐久高校グランドの北側に隣接している。株式会社イケウチの新店舗が建設されることから緊急発掘調査が昭和60年5月21日より6月5日まで行なわれた。

検出遺構は、住居址2棟、溝状遺構2基であつた。釧は1号住より約15点（破損しているものの接合関係が未把握のため）出土した。弥生時代後期の南北約10m、東西7mを測る大形の住居址東壁中程に南北推定16m、東西13mの長方形を呈する土壌より検出された。当初は何らかの意図で供献されたものと考えたが、釧の出土状況及び多くの人骨と思われる焼骨の出土により、埋葬された人間が身につけていたものの[illegible]性が大きいと考えられる。仰向けに埋葬されたと仮定すれば、東側の5点の釧内にあ

つれ2本の骨は左腕の尺骨と橈骨にあたる。他に左上腕骨、頭蓋、手骨と考えられるものが検出されている。剣は径約6cm、厚さ1.5mmを測る。現在のところ鉄造船か鍛造品かは判明していない。当時青銅製の剣など、とても普通の人が入手できるものではなく、この人物は特定の人と言えよう。この人骨と剣の上部には、頭部から胴部へかけて、高坏・甕・壺・甕という順序で4個の土器が正位に置かれていた。また、骨の上下から多くの炭が出土しており、熱を受けた骨と合わせ考えると埋葬にあたり土壙内での火が想定される。他に壺・甕・高坏・坏・手づくねなどが33個体以上出土している。

北西久保遺跡第二次調査

三石宗一

北西久保遺跡は、学校法人佐久学園による短大建設に伴ない、昭和57年佐久市教委によって行なわれた第一次調査のあとをうけ、昭和60年5月より当佐久遺跡文化財調査センターによって当地の南西部約6,500㎡にわたり、第二次調査が行なわれている。現在、プラン確認作業がほぼ終了し、弥生時代住居址、周溝などが多数検出されている。

北西久保3号墳は、この台地の南斜面に位置し、標高686mを示す。墳丘は、台地斜面を利用して構築されており、Dトレンチより確認された周溝から、規模は直径約20mと推定される。石室の内部構造は、竪穴式石室で、南東に開口し、羨道と南側側壁は失われており全体の形状は不明である。平面プランは、楕円状で全長3.2m奥壁幅1.2mを測る長方形で、やや胴張りがみられる。石質材は、白倉先生の御教示によると、奥壁に集塊岩、側壁に安山岩が使用されており棺床には千曲の河原石がしきつめられている。

遺物は、金環8、勾玉3、切子玉5、管玉1丸玉23、ガラス小玉94、直刀2、刀子、銅製品、人骨、須恵器蓋などがあり、他に昭和54年度の市教委による試掘時に、金環・馬具などが出土している。その他、石室東側より平面プランが不詳明な集石を伴なう土壙が確認され、高台付坏2、灰釉輪花皿が出土している。

川上村三沢遺跡

島田恵子

三沢遺跡は、野辺山矢出川遺跡に近接した東方の山際に位置し、豆腐石（1786）m付近から流下してくる支流の渡歩地点から西方の道に添った、標高1300～1350mを測る地点に遺跡が所在している。

発掘調査はゴルフ場建設に伴ない、川上村教委より委託をうけた佐久考古学会が主体となって、5月8日～7月30日に亘って調査を実施した。第1、2地区の2箇所を行ない、第1地点は、縄文時代中期後葉（九兵衛尾根式）の遺跡

が10m×20mの範囲にわたつて顕現した。それは、土 墓7基を中心に5角形を呈した柱状節離の50m×20cmを測る立石、拳大～頭大の礫と土器片、水晶、黒曜石、チャートの剝片、石匙石鏃等を散在させた祭礼の場が主な遺構である。該期の遺跡は竪穴住居址が浅いためにその後の遺構に破壊され、その実態体は解明されていない。また、墓域の周辺一帯に試掘調査を入れたが住居址の存在は皆無であつた。緑地帯として残る上方の林の中に集落が予想される。

第2区は先土器時代の遺跡で、礫群・配石遺構および石器類が検出された。石器類の出土層位は、3層に分けられる森林黒墨土の最下部（地表下50cm）より4～5層のローム層（50cm）内に包含されている。茂呂系ナイフ形石器（南関東フエイズ2B期16,000～17,000年）を主体とし、石核、剝片等で石質の素材はバラエテイに富み、チャート、黒曜石、頁岩、水晶、硬砂岩、シルト岩、流文岩、硅板岩、輝緑凝灰岩等でそれぞれの石質に分割されたブロックを呈した状態で出土した。特に水晶が多量であつたことは産出地を有す川上村ならではの特徴といえよう。

また、礫群・配石遺構はセットになつて、ローム下50cmより検出された。直径16mの範囲を円形状に配置し、6箇所のブロックを形成している。礫群は1ブロック20～30個、配石は5～10個を数えるセットを有しており、肉眼では礫群の火熱を受けている状態は観察できなかつた。尚、礫群下10cmまで石器が包含されていた。また、礫群、配石の存在した地床面は固く、当時の生活面である様相をよく示していた。

全国的に著名な矢出川、柏垂遺跡群は農業の深耕によりほとんど破壊され、発掘調査例も少ない。こうした現状の中で今回調査した三沢遺跡は森林地帯の中にあつて、人為的変化のほとんどなされていない地区で、遺構、遺物の遺存状態は極めて良好であり、今後の研究発展における貴重な資料となろう。

また、本調査のなされた一帯は3mの盛土がなされ保護される。

鋳師屋遺跡群前田遺跡

堤　隆

鋳師屋遺跡群前田遺跡は、佐久市西屋敷部落の東方に所在する。地籍としては、御代田町大字御代田と佐久市大字小田井の双方にまたがつている。昨年には、本遺跡と隣接し、同一遺跡群の中で把握される、鋳師屋遺跡と野火付遺跡が調査されている。

前田遺跡は、昭和60年度小田井・御影地区県営ほ場整備事業に伴なつて調査されているもので、約22万平方メートルにおよぶ調査対象地区のうち約4万平方メートル程が遺跡として把握され、現9月の時点でその調査をほぼ終了しようとしている。

現在までに検出されている代表的な遺構は、竪穴式住居址約150軒、掘立柱建物址約100

棟、土壙、井戸址、掘状遺構等である。

竪穴住居址は、古墳時代中・後期に属するものも数かにみられるが、そのほとんどは奈良・平安期の所産と考えられる。広範囲な面調査により歴史時代における東国集落の具体像がより詳明になってくるものと思われる。

掘立柱建物址は、現段階では時期決定がなされていないが、おおよそ二者に大別できるものと考えられる。まず一者は、奈良・平安時代の竪穴住居に付随するもの、もう一者はそれ以降〔中世〕の所産と考えられるものである。いずれにしても100棟という数の多さには圧倒される。あるいは、東山道沿いに存在した官公庁的施設という性格付けも可能となろうか。

さて、検出された遺物としては、一般的な生活用具〔土器・石器〕が主であるが、鉄製農具（鎌・鍬）や、鉄滓等もみられた。また、特筆すべきは、2点の円面硯（平安時代）の出土と銅椀1点の検出で、地方官人の居住も想起させた。奈良時代の土器群は、佐久地方の当該期の研究に大きく寄与するものであろう。

事務局からのお知らせ

○ 訃報

佐久考古学会の長老の1人で、長い間にわたって熱心に発掘調査活動を続けてこられた佐久市岩村田の森泉定勝さんが、この7月22日に御逝去されました。享年79歳でした。

森泉さんの永年にわたる研究活動と御努力に対しまして、深く感謝いたしますとともに、謹んで哀悼の意を表する次第です。

○ 新入会員紹介

下記の3氏が当会に新しく入会されました。今後ともより一層研究活動の輪をひろげてゆきましょう。

※ 小林春子　〒384-03 臼田町勝間202-4　TEL（0267）82-2141

※ 和久井義雄　〒385 佐久市新子田内池1738-3　TEL（0267）67-0163

※ 金成弘臣　〒384-01 佐久市中込石神653　TEL（0267）62-3845（中込中学生）

○ 新幹事紹介

高橋の三石宗一会員が新しく幹事の1人として加わりました。スタッフがより強力になり頼もしいものです。

○ 上総への研修旅行実施される。

一上総国の探訪を求めて一去る9月22日・23日の二日間昭和60年度の研修旅行が実施されました。参加者は佐久考古学会員と佐久の発掘調査をお伝いいただいている協力者の皆さん総勢26名でした。初日は、佐倉の国立歴史民俗博物館を見学の後、成田山新勝寺で有名な成田市に宿泊各自成田山詣をすませました。二日目は、芝山町の芝山はにわ博物館を見学し、そこに展示されている埴輪を出土した前方後円墳殿塚・姫塚を訪ずねました。なお、研修が滞なく実施できたのは、現地での村山好文氏(日本考古学研究所)の名案内と、中沢運転手さんの安全運転によるものです。

通信では、号を改めて、上総への紀行文を掲載する予定です。

##

後　記

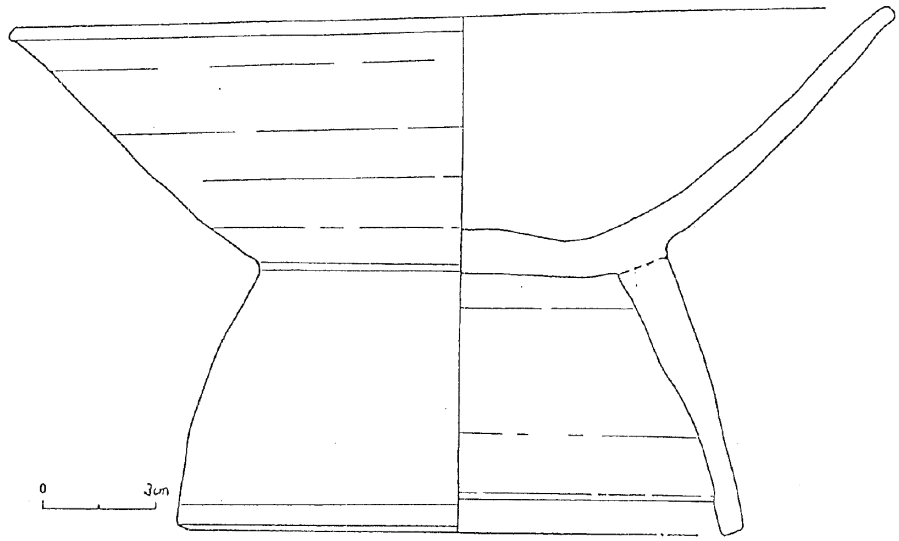
森泉定勝さんが亡なられた。べらんめえの江戸ッ子気質の森泉さん、発掘現場ではよく叱咤されたものだ。平賀の伍賀山古墳の調査以来、古墳調査に熟了された森泉さん。古墳の精査といえば狭い玄室の中でハケを動かす森泉さんの姿がうかんでくる。

亡なられる一寸前に入院先の浅間病院をお訪ねしたとき、塚下の北西久保遺跡の古墳から金環や玉類が検出されたことをお話すると、「オレもいま一度古墳を掘つてみてえな」とポツリと言われた。元気になつてまた一緒に調査しましようと別れたものの、それが最後の会話となつてしまつた。

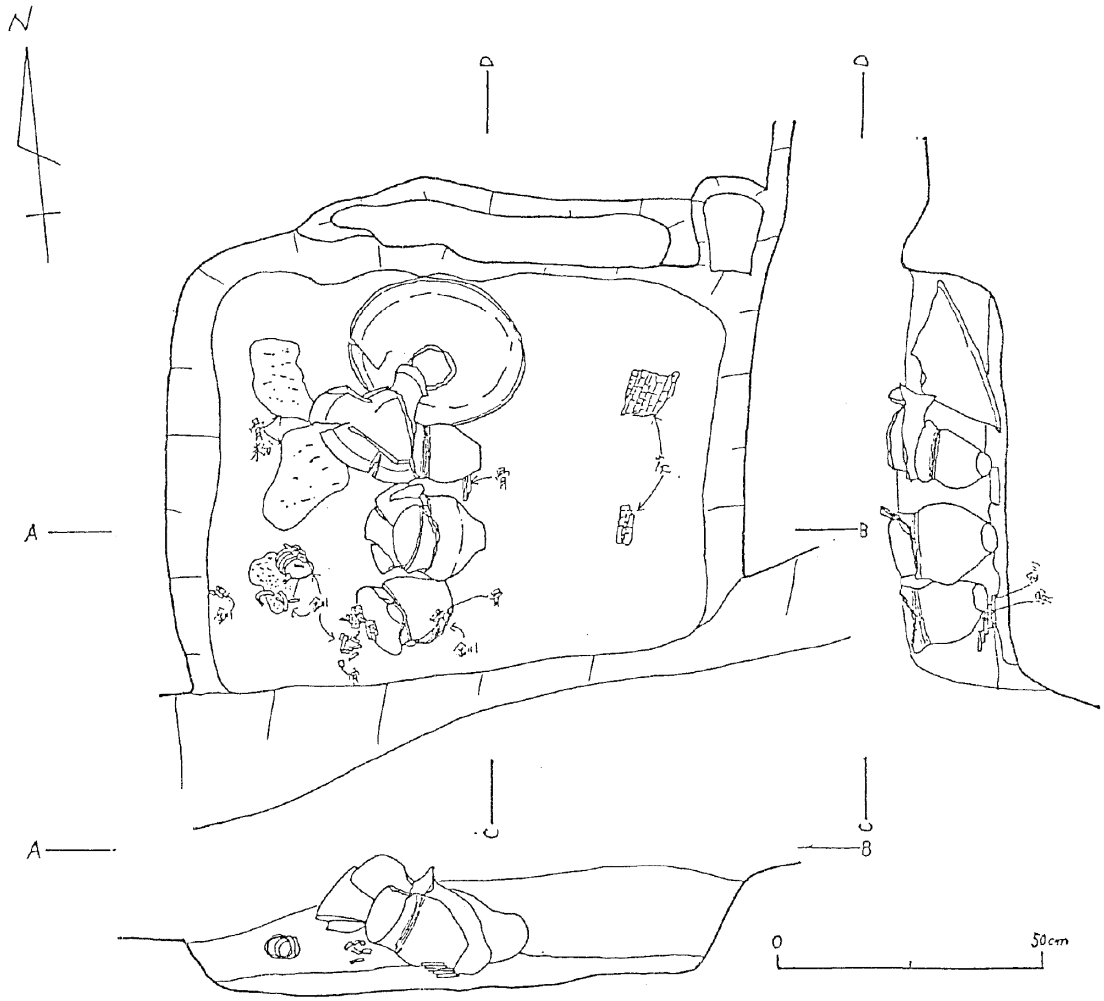
文化財保護は現在、危機的な状況に置かれていますが、私たちは森泉さんの真直ぐな姿勢を忘れることなく研鑽してまいりたいと思います。安らかにお眠り下さい。(T・T)

##

佐久考古通信第35号
発行所:佐久考古学会
長野県佐久市岩村田1040～7
木内　捷方(〒385)
TEL 0267 68 0617
発行者:由井　茂治
編集者:井出正義(編集長)　高村　福島
森泉　小山　晃



第１図　蛇塚Ｂ遺跡群野馬久保遺跡１号住居跡出土遺物



第２図　琵琶坂遺跡群上直路遺跡１号住居跡土抗内遺物出土状態

佐久考古通信

№ 36
1986．1．1
佐久考古学会

目　　次

新年の挨拶　（由井茂也）　1
佐久考古学会15周年記念祝典盛大に行なわれる　（木内　捷）　2
旅行記　上総国の埴輪を求めて　（三石宗一）　2
昭和60年度佐久埋蔵文化財調査センター発掘調査概要報告　3
（高村博文・三石宗一・小山岳夫）
宮下健司会員藤森栄一賞受賞　11
事務局からのお知らせ　12
後　　記　12

新　年　の　挨　拶

会長　由井茂也

新年おめでとうございます。去年は、二ヶ月ばかり休暇をとって、十ヶ月で一年間が終り皆さんに大へん御迷惑をかけました。

改めて一年を省みると、一九八五年は、佐久考古学会にとっては、忘れられない意義深い年でありました。

一年をくくる忘年会の席上で、各地域の皆さんからの活動報告が行なわれ、非常に興味深くおききしました。

旧石器時代の故郷、川上村三沢遺跡で、旧石器に出合ったことは当然ですが、地元の考古学会で旧石器遺跡の発掘調査を担当したことは意義深く大きな自信を持つことになったと思います。

佐久町に於ける縄文早期の落し穴遺構を初め、小海町、臼田町、御代田町、小諸市、望月町等の各遺跡の調査研究と、各々の特徴ある報告、ほんとに楽しく教えられました。

特に佐久市に於いての廣汎な遺跡の調査では、弥生時代から、古墳時代へ、更に歴史時代へと佐久の歴史を一頁づつめくっていくような精緻な研究が進められようとしています。

こうした重要な責務を担うことに今更ながら大きな誇りと同時に責任を感じます。

また十月十二日には、佐久市役所を会場として、佐久考古学会創立十五周年記念祝典を行うことが出来ました。招待者、講師諸先生、会関係者多数の参列を得て盛大な式典が挙げられたことは大きな感激でありました。これらの学会活動は亦、会員以外から多くの方々の御指導御協力を受けての成果であってこの点も改めて御礼申上度いと思います。

更に今年は、予定されている事業、亦既に計画されている諸事業が山積待ち構えている上に、関越道上越線の着工も組込まれ、地元としての学会活動は一層重要性を加えてきます。懸案の矢出川遺跡の保存運動も新しい動きをしています。会員皆さんの一層の御協力をお願いし、同時に御健勝を御祈り申し上げて、簡単ですが新年のご挨拶といたします。

佐久考古学会１５周年記念祝典盛大に行なわれる

事務局長　木内　捷

佐久考古学会15周年記念祝典は、10月12日午後2時より佐久市役所にて開催された。

お忙しい中駆け付けて頂いた明治大学教授戸沢充則、諏訪考古学研究所宮坂光昭、県史刊行会笹沢　浩、佐久史談会臼田都雄、佐久市志刊行会大井隆男、木内　寛、佐久市教育次長柳沢昇一、開発公社局長花里禅の諸氏をはじめ関係者118名が参加した。第1部は祝典で、祝辞を頂いた後、学会のこれまでの歩みがふりかえられ、また、今日の学会の基礎を築かれ今はなき先学にたいし黙禱が捧げられた。

また、15周年記念事業の一環である会のシンボルマークが20点の応募の中から決り、浅沼　馨氏に賞状と記念品が由井会長より渡された。絵はがきにもこのマークが掲げられている。

式典後、記念講演が行われた。佐久に関係の深いお二人である。まず、筑波大学教授岩崎卓也氏の講演を頂いた。汎日本的見地から、信州そして佐久の古墳・古墳時代を考える上で、有意義なものであった。続いて、千曲川古代文化研究所主幹森嶋　稔氏の講演が行われた。佐久考古学会の歩みを内からそして外から見られ、今後の学会活動の一つの指針を提示された。

講演終了後、一階食堂にて祝宴が開かれた。遠来の仲間も多く、学会の歩み、思い出、研究について等々、話に花が咲いた。さらに、会場を洞源湖観山荘に移し、夜遅くまで話は尽きなかった。

最後に、祝典開催にあたりご協力を頂いた皆さんに厚くお礼申し上げる。

旅行記　上総国の埴輪を求めて

三石宗一

昭和60年9月22日早朝6時、定刻通りバス2台を連ねて佐久市役所を出発、途中、歯痛により、佐々木氏が参加できないことを伝えに来た奥さんの「美枝子さん」に見送られ、一路千葉県佐倉市をめざしてR141を南下する。中央高速道・首都高速・東関東自動車道と、ワゴン車のガス欠・パンクというハプニングにも負けず車は快適に走り続け11時半無事、佐倉市国立歴史民俗博物館に到着、ここで昼食をとった後見学。第1展示室から第3展示室までは、原始・古代から近世までを時代順に、第4展示室には日本人の民俗世界に関するテーマを展示してある。館内の広さに驚きながら見学し、見終った後は全員疲労の色が隠せない様子である。午後5時頃、宿舎である梅屋旅館に到着、夜は村山氏も加わり、大宴会となる。その後も、外に出て女の子を追いかける人、宴会の続きをする人、碁をうつ人、早く寝る人、それぞれ成田での夜を楽しんだようである。

2日目は、早朝の成田山新勝寺を散策した後8時半宿舎を出発、村山氏の案内で今回の研修旅行の最大のテーマである、芝山町はにわ博物館と殿塚・姫塚古墳を見学する。殿塚古墳は長さ88m高さ10mで二重の堀をもち、姫塚古墳は長さ58m高さ6mで一重の堀をもつ6世紀築造の前方後円墳である。はにわ博物館は、仁王尊観音教寺が設立した私立博物館で、殿塚・姫塚古墳より出土した埴輪など300余体の形象埴輪が展示されている。もう一度ゆっくり見学したい所である。頭上を飛行機が飛び交い、成田空港を見学したいという声もあったが、時間の都合により、とり止めにし、村山氏の先導によって、成田I.Cより東関東自動車道にのり、市川・高井戸・須玉を通り、午後6時全員無事に佐久市役所に到着した。

最後に、2日間マイクロの運転をしていただいた中沢さん、御苦労様でした。そして村山さん、御結婚おめでとうございます。

昭和60年度佐久埋蔵文化財調査センター発掘調査概要報告

高村博文・三石宗一・小山岳夫

佐久埋蔵文化財調査センターが5月より発足してから遺跡の調査は、着手順に第2次北西久保遺跡、西裏遺跡群西裏・竹田峯遺跡，栗毛坂遺跡群芝間遺跡，筒畑遺跡群池畑遺跡，猫久保遺跡群西御堂遺跡の6遺跡を実施しました。以下にその発掘調査の概要として成果を中心に報告したいと思います。

1）第2次北西久保遺跡

○動機　学校法人佐久学園が行う短期大学建設に伴う調査

○所在地　佐久市岩村田字北西久保

○発掘調査期間　S60．5．16～12.13

○検出遺構

南部の南斜面　古墳址1基（7世紀後半），特殊遺構1基(平安時代)，土坑1基

台地の平坦部　竪穴住居址68棟（弥生時代中期49棟，後期18棟，時期不明1棟）周溝10基，特殊遺構2基（古墳時代1基，江戸時代1基）、溝状遺構6基，土坑77基

東部の南斜面　礫群6基，ピット列1基

○成果について

今回の台地上南半部、東部南斜面の発掘調査と南部南斜面古墳址の確認調査によって、第1次調査とあわせ、北西久保遺跡の全容がほぼ明らかになってきた。一つの台地上が、そっくり調査された例は、県内では辰野市樋口内城遺跡①以来のことで、全国的にみても僅少な例であり、特に弥生時代中期～後期の集落址（ムラ）の全容と各時代の変遷関係を明らかにできる資料を得られたことは、学術的な意義が極めて多大なものと言える。

検出された遺構は、弥生時代では、竪穴住居址、古墳時代では、古墳址の周溝と考えられる遺構が主体を占め、第1次調査でみられた古墳時代中期（和泉期）及び平安時代の竪穴住居址（以下住居址とする）は、今回、全く検出されなかった。以下、遺構について時代別に概観してみたい。弥生時代中期後半の住居址は第1次で44棟、今回49棟、計93棟が検出されており、該期の住居址相互に2～3棟の重複を有するものもあり、出土遺物の整理検討により少なくとも2時期にわたる中期の集落址のあり方が相定できそうである。

弥生時代後期前半の住居址は、第1次で15棟、今回18棟、計33棟が検出されている。

後期の住居址相互の重複関係は、第1次調査分で3例認められるが、全体に割合規則的な間隔で分布していることが看取され、ほぼ同一時期に形成された集落と予想されるが、今後の整理検討課題としておきたい。遺構内容の詳細については正式報告に譲るが炉址のあり方（特に位置関係）については、調査時において、時期的な差異がある程度判別できたので、ここで記しておきたい。

中期の住居址の場合、炉は住居址のほぼ中央に位置し、後期の住居址になると北側に移行し、北側の主柱穴間に位置するようになる。炉の形態は地床炉及び地床炉に炉縁石を1個有する例が圧倒的に多く、他に「L」状、「コ」状の字状、「ロ」の字状の石囲炉や土器敷炉、また、天竜川水系の弥生時代住居址に特徴的に付設される埋甕炉等もみられる。時期別には、中期の炉は、地床炉と地床炉に炉縁石を1個有する例と埋甕炉であり、後期は石囲い炉、土器敷炉、埋甕炉、地床炉等、多様である②。また、後期の住居址には副炉が付設される例もみられる。この他にも、中期と後期の住居址には、形態、内部構造等、内容に相違する点が多くみられ、正式報告では、この変遷過程も明らかにしてゆきたい。

古墳の周溝と考えられる遺構は、第1次6基、今回10基、計16基が台地の全域にわたって分布する。このうち、第1次調査により、石室の残存する古墳址1基と、長野県では初めてといえる、形象、円筒の多数の埴輪が出土している周溝古墳址の存在から、古墳に伴なう周溝と位置づけてほぼまちがいないと考える。周溝の台地上で

の分布は、東及び南側の台地縁辺に15基の周溝が南から北へ連なるように分布し眼下の水田地帯を望む。他の4基のうち、大型の周溝3基はほぼ等間隔に北東から南方へ伸びる台地の中央線の付近か西側に分布している。周溝の規模は溝幅を含めた直径が35mを越える大型のものから6mの小型のものまで様々であり、S－2、S－3、S－4のように周溝を共有する例もみられる。以上、北西久保の周溝群つまり古墳群は、独立した台地上にかなりの密集度をもって群集しており、その点で県内では稀有な例と言え、今後、同様な資料に当たり意義づけてゆきたい。また、これらの遺構の年代は、現在、埴輪、土器等から5～6世紀代であると推定されているが、出土遺物等を分析し、できれば築造の順序についても解明できればと考えている。③

その他、溝状遺構、土坑については時期及び性格とも不明なものが多いが、弥生時代中期後半の墓址と考えられる土坑が数基認められ、不明な点が多い千曲川水系の弥生時代中期後半の墓制の良好な資料となるかもしれない。

江戸時代の遺構は、台地上の南東端、斜面になる縁辺付近から検出された特殊遺構がある。台地の斜面にかかる端部を孤状に掘り込んでつくられた平坦面に存在する3基の土坑からは、いずれも良好な形の人骨が各一体ずつ出土し、そのうち2体には、寛永通宝（1645年鋳造）がそなえられていた。中でも一体にそなえられていた寛永通宝は、毛髪（?）に6枚丁寧に包まれて腹部へそのやや下から出土し、これによって人骨に確実な年代が与えられたことになり、既期の葬法や仏教との係わり、民俗学的な研究にとっても良好な資料となるであろう。

南部の南斜面の調査においては、古墳の石室残存部が確認できた。残存していた石室は、南東に開口しており、奥壁下部、右側壁の下部、左側壁の範囲を推測できる石列が検出できた。また千曲川の小円礫を利用した礫床が存在し、羨道部付近は攪乱のため明らかでないが、玄室内全面に敷きつめられていたことが窺える。

さらに、石室の南東部付近から灰釉陶器輪花椀の完形品等が出土した特殊遺構が検出された。性格は平安時代の土坑の可能性が強いと考えられる。

東部の南斜面の調査区は、第1次調査の台地上から連なる約30度の勾配をもつ急斜面とその基部である低面にあたる。この調査区の西隣は、昭和41・45年度に発掘調査が行われており、鎌倉時代と考えられる五輪塔、火葬墓等、中世の墓域に深く関連する遺構・遺物が検出された。このような状況から当初これらに連なる中世墓域の一端の検出が予想されたのであるが、実際に検出された遺構は、時期・性格の不明確な礫群が6基とピット列が1基で、該期の墓域に直接関れると考えられる遺構は発見できず、本調査区まで墓域が続かないことが判明した。

斜面基部の西側に集中して検出された礫群は明確に時期決定できる遺物に欠けるが、検出層位から見て大きく三時期に分けることが可能である。斜面の基部は、地山まで3層からなる土が220cmの厚さで堆積し、それぞれに文化層を形成している。各層の時期については今後、出土遺物等を検討しなければ決定できないが、最上層にあたる第Ⅰ層からは、近・現代と考えられる遺

物、及び台地上から、流れ落ちたと考えられる摩耗した弥生・古墳時代の土器等、第Ⅱ層からは平安時代、第Ⅲ層からは弥生時代の遺物が主体的に出土しており、それぞれの文化層の時期を考える上での有力な手掛りとなりそうである。このような堆積の状況下で、礫群1は第Ⅰ層中礫群2・3は、第Ⅱ層中、礫群6は第Ⅲ層中より検出されており、それぞれに形成された時期に相違のあることを示している。性格については、これらの礫群のあり方に規格性、配列性などが全く認められず、人為的なものか、自然営力によって形成されたものか、現状では判断できず、今後の課題としたい。

ピット列は、東西方向一列に6個検出された。掘立柱建物址等の柱穴列であることも想起されるが、同様のピット列が存在すると考えられる南側が傾斜地の下部であるため、確認ができず当ピット列の時期・性格も礫群と同様決定する根拠に乏しい。遺物としては、礫群3中より検出された平安時代と考えられる土師器杯、全体層序第Ⅲ層中より検出された大型の打製石斧（弥生時代か？）が代表例としてあげられる。

今回、台地の裾部（斜面からその基部にあたる平坦面）の調査は、各文化層の時期決定ができかねている現状であるが、台地上にくらべて、層位的に年代を把握する発掘調査がより可能であることが理解できた点で意義深い。また、今回の遺物の出土状況は従来、見すごされてきた低地部にも遺構が存在する可能性が強いことを示唆するものである。現在、関東の各地域では低地の発掘調査例が増加しており、多くの成果をあげている。例えば、埼玉県では東日本で未発見であった弥生時代初頭（中期前半）竪穴住居址（集落址）が発見され、また、遺跡数が極端に少なかった縄文時代晩期の遺構も、低地部からの発見が各地で相次いでいる。このように、従来、未発見の遺構が確認できる点に留まらず、低地部の調査は、植物等有機物質の遺存体が豊富に検出される特性を有する。これは、当時の生活・環境等を知る手掛りとなる情報量が台地上に比べて圧倒的に多いことを示しており、原始・古代等の社会を復元することが考古学研究の主テーマである限り、これらの地域により注意を払ってゆくことが今後の大きな課題と考える。

以上から本遺跡の存在する北西久保台地（江戸時代に造られた常木用水に区切られて南方に突き出した台地部）の古代人の足跡を第1次調査結果も含めて概観すると、まず、この台地に最初に足を踏み入れ定住したのは、弥生時代中期後半と考えられる。この時代には、北側の一部を除き台地上の全域にわたって、広く住居址が存在し、各時代を通じて最も活発なムラが営まれていたものと想像できる。次の弥生時代後期前半は、南端部及び東半部付近に住居址の分布がなく、台地中央からやや西側に偏在し、集落址が縮少する傾向が看取される。続く後期後半及び古墳時代前期の住居址は台地の北東部に1棟ずつしか検出され

ておらず、この台地上に集落の空白期間を向える。古墳時代中期になると台地上北東部に偏在した住居址群（集落）が出現する。この集落は台地上の南西部の端に位置する当大地、最大の規模（径35mを超える）の大型古墳と同時期に営まれた可能性があり、今後の整理作業では、その対応関係をテーマに追求してゆきたい。

古墳時代後期になると、住居址は存在せず台地上のほぼ全域と南部斜面に、密集した古墳群が造営され、台地がそっくり墓域に転化したものと考える。古墳群の平面的分布から、築造の順序及びその被埋葬者を推測するに、今の段階で考えられることを列挙しておきたい。まず、大型の古墳3基は少なくとも北西久保・一本柳一帯を支配し得た首長級の人を埋葬したものと考えられ、台地南西部の端に最初に築かれ、順序、北方へ等間隔に築造された可能性が想像できる。そして、台地の東及び南側の台地縁辺に存在する15基の小型の古墳は、築造年代が後出する考えと、一方、3基の大型古墳の被葬者と同族関係にある人々の培塚となる可能性も考えられる。今後の遺物整理作業において、特に注意してこの問題に当ってゆきたい。また、周溝のみの検出であったため、その墳丘及び埋葬施設の問題についてもあわせて検討してゆきたいが、周溝内覆土より出土している礫（葺石の可能性が考えられる）より、ある程度の墳丘の存在が予想される。

奈良・平安時代には、再び集落址として、とらえられる住居址群が北東部に点在するが、その範囲はかなり限られる。また、台地中央付近の大型の周溝内と、南部南斜面からは土坑墓の可能性の強い遺構が検出されている。当時代から斜面及び台地裾部地域には、次代の五輪塔出土にみられる中世に継続する墓域が出現しはじめる。さらに、近世（江戸時代初期）においても、南部東斜面には、前述したような土坑墓が検出されており、墓域としての利用は継続している。

最後に、この調査が学問的水準をおとさず終了まで行えたのは、ひとえに精魂こめて作業にあたってくださった調査参加者の皆さんと終始変わることなく暖かい御援助と御助力をして下さった、地元のみなさんのおかげです。文末ながら記して感謝し、心からお礼申し上げます。

注1. 長野県史刊行会、笹沢浩氏の御教示による。

注2. 佐久市教育委員会林幸彦氏の所見による。尚、このまとめにおいて、林氏の示唆及び助言によることが多いので注文としては取り出さないことを記しておく。

注3. 前掲注1.

参考文献　林幸彦（昭61）「長野県北西久保遺跡」『弥生文化の研究7巻－弥生集落一』雄山閣

佐久市教育委員会（昭60）『はにわ展－佐久市北西久保遺跡第1号古墳出土の埴輪を中心として－』

2）西裏遺跡群西裏・竹田峯遺跡

○動機

西裏　佐久市土木課が行う市道拡幅工事事業に伴う調査。

竹田峯　岸野同和対策集会所建設事業に伴う調査。

○所在地　佐久市根岸字西裏及び伴野字竹田峯

○発掘調査期間　西　裏　S 60.7.10～8.29

竹田峯　S 60.8.27～10.4

○検出遺構

西裏遺跡　竪穴住居址21棟（弥生時代中期～後期16棟，古墳時代前期～平安時代5棟）、特殊遺構1基（古墳時代中期）溝状遺構4基，土坑9基，ピット群1

竹田峯遺跡　竪穴住居址5棟（弥生時代中期3棟，後期2棟）特殊遺構3基（弥生時代壷棺1基含む）方形周溝1基（弥生時代？）円形周溝2基（弥生時代？1基，古墳時代？1基）溝状遺構3基，土坑17基（弥生時代～平安時代。）ピット群。

○成果について

1）西裏遺跡

今回、調査を実施した西裏遺跡は、遺跡の存在する台地に約6m幅のトレンチを南北に調査したことに等しく、遺跡の性格を知る上でたいへん貴重な成果が得られた。

検出された遺構は、弥生時代中期～後期の竪穴住居址群が主体を占め、古墳時代前・中、奈良・平安時代の竪穴住居址（以下住居址とする）も検出された。このことから、本遺跡は、長期にわたる複合遺跡であり、その密度を推定するに、台地基部附近から標高664m附近までは、密度の濃い弥生時代中期～後期の大集落址が存在することが予想され、古墳時代中期（和泉期）の集落も台地の高台付近に、かなり存在するものと考えられる。

西裏遺跡の調査で特筆すべき遺構・遺物は、D・E区の境界付近から検出され、新聞にも報道された、完形土器5個体を出土したTI号特殊遺構とI区より検出されたM3号溝状遺構内のピットに正位で埋められた甕があげられる。今回は、道路の拡幅という限られた地区での発掘調査のため、これらの遺構の全容が把握できないという問題はあるものの、今後の整理作業を通し、できるだけその性格を明らかにしていきたいと考える。

2）竹田峯遺跡

竹田峯遺跡の調査は、西裏遺跡と異なり、集会所建設予定敷地という条件から、広範囲の調査が行なわれたため、西裏遺跡群におけるこの地区の性格がほぼ、解明できるものと考える。以下、整理作業が終っていない現段階で、今後の報告書作成に向けて本遺跡の問題点、課題等を含めて、その成果を、概略的にまとめてみたい。

まず遺跡の性格として検出された住居址をみると5棟とも、弥生時代中期～後期のみであり、先

の西裏遺跡で検出されていた、古墳時代及び平安時代の住居址の存在はなく、弥生時代中期～後期においての、該期の住居址群の北方終焉部と言えそうである。

また、古墳～平安時代には、竪穴住居址を利用した一般的居住地空間としての利用は、なかったものと判断できる。

さらに、弥生時代後期と推測される、周溝及び弥生時代中期～後期の土坑の存在から、該期においては、むしろ墓域として利用されていた可能性も大きいと考えられる。

他に、第3号周溝の性格は、現在調査中の北西久保遺跡と同様古墳の周溝と想像されるが、今後の整理作業の課題としたい。

また、多数のピット群、ほぼ南北に検出された溝状遺構等、その時期、性格についても追求したい。

最後に、竹田峯遺跡で最も注目に値する遺構・遺物としては何といっても、第3号住居址西隅より検出された、弥生後期の壷棺であろう。

佐久地方の発掘調査で発見されている壷（甕）棺は、周防畑B、戸坂第3次、蟻畑遺跡の3遺跡5例であり、今回のように、胎児骨（聖マリアンナ医科大学森本教授の鑑定による）が検出されたのは、県内でも稀有な資料である。さらに管玉2点、ガラス小玉2点が伴出しており、当時の風俗、習慣等の研究においても、新たな問題を提起するものと言える。

3）栗毛坂遺跡群芝間遺跡

○動機　佐久市土木課が行う市道芝間線道路改良事業に伴う調査。

○所在地　佐久市岩村田字芝間

○発掘調査期間　S 60.10.14～11.15

○検出遺構

住居址4棟（古墳時代後期1棟，平安時代3棟）、特殊遺構1基（平安時代？）、竪穴状遺構1基（中世），溝状遺構4基，土坑5基，掘立柱建物址？1基

○成果について

今回、調査を実施した芝間遺跡は、道路の拡幅工事のため幅5mという限られた範囲での調査のため、検出された遺構において、その全容を把握することができないという問題はあるものの、現時点で考えられる成果を簡単にまとめてみたい。尚、詳細な検討は今後の整理報告書作成に際し行なってゆきたい。

検出された遺構は、古墳時代後期（鬼高期）、平安時代の竪穴住居址、中世と思われる竪穴状遺構等である。その分布は北区においては、平安時代の竪穴住居址＜以下、住居址とする。＞（2，3，4　住）が3棟検出され、これらの住居址は、調査区の西側にのびている。このことから、調査区の北，西側に続く微高地には該期の集落の展開が予想される。南区においては、古墳時代鬼高期の住居址（1住）が一棟検出されたが、調査区の西、南側には、該期の土器が表採され、古墳時代の集落の存在が予想される。本調査で特筆すべき遺構、遺物は、第3号住居址のカマドとTa－1竪穴状遺構及び特殊遺構より出土した鉄製器があげられる。

第3号住居址より検出されたカマドの遺存状態

は、非常に良好で煙道・天井部の一部が欠損しているのみで、袖石、支脚石は、面取りされた安山岩、軽石が構築材として用いられており、ほぼ往時のまま残存している。さらに、支脚石が２個検出されているが、同様に支脚石が２個検出されている例としては、兵士山遺跡第１号住居址、鋳師屋遺跡第１号住居址等がみられる。

このように当カマドは、佐久地方より検出される平安時代のカマドの構造等を考究するうえで、良好な資料であるといえよう。

また、K区より検出されたＴａ－Ｉ竪穴状遺構は、出土したカワラケより平安時代以降の所産であると考えられる。従来、竪穴状遺構は、不明瞭であったが、大井城跡（黒岩城）、桜井石堂遺跡、御代田町野火付遺跡より、明確な竪穴状遺構が検出されている。本遺跡より検出された竪穴状遺構もその貴重な一例となるであろう。

本遺跡の南西約１２Ｋｍの台地上に所在する大井城跡（黒岩城）は、昭和５９年に佐久市教育委員会によって調査が行なわれ、１４～１６世紀の竪穴状遺構53基を中心として、多数の遺構群が検出されている。また、西方約７００ｍに所在する六供後遺跡では、大井城跡に関ると思われる断面「U」字形の溝が検出されている。この２遺跡と本遺跡より検出された竪穴状遺構との関連性も考慮すべきであろう。

さらに平安時代の所産と考えられるＴ１特殊遺構より出土した鉄製品は、筑波大学教授岩崎卓也氏に見ていただいたところ、ハサミとのことである。このハサミが平安時代のものとすると、佐久地方、最古のハサミと言えよう。

4）筒畑遺跡群池畑遺跡・猫久保遺跡群西御堂遺跡

○動機　佐久建設事務所が行う県道香坂中込線バイパス改良工事計画（高速道路関連工事専用道路）に伴なう調査

○所在地

池畑遺跡　佐久市安原字筒畑

西御堂遺跡　佐久市安原字猫久保・西御堂

○発掘調査期間　Ｓ60.11.15~12.24

○検出遺構

池畑遺跡　竪穴住居址２棟（弥生時代後期終末～古墳時代初頭２基）土坑１基（奈良時代？），溝状遺構２基

西御堂遺跡　土坑２基

○成果について

今回、調査を実施した、池田・西御堂遺跡は道路の改良事業のため、幅約12mという範囲での調査であり、遺跡の存在する台地全体を把握することはできないが、現時点で考えられる成果を簡単にまとめてみたい。尚、詳細な検討は今後の整理報告書作成に際し行なって行きたい。

検出された遺構は、池畑遺跡において弥生時代終末から古墳時代初頭と思われる竪穴住居址（以下住居址とする）２棟，奈良時代から９世紀代と思われる土坑１基がある。

今回の調査は、筒畑遺跡群の存在する台地の南部中央付近に東西に横断するト

レンチを入れたことに等しく、以上の遺構検出状況から、確実に弥生時代後期から古墳時代初頭の集落址の存在が明らかとなったことは大きな成果といえる。

調査区西側より検出された第1・2号住居址は、佐久地方で今まで不明瞭だった弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる住居址である。佐久市における古墳時代前期と考えられる住居址の検出例は、非常に少なく今井西原遺跡で1棟，北西久保遺跡で1棟の2例しか知られていなく、当住居址2棟は、該期の住居址形態を知る上で良好な資料といえよう。

また、調査区東側より検出されたD1号土坑は、牛馬骨とともに出土した遺物より、奈良時代から9世紀代の所産[①]であると考えられる。当土坑より出土した牛馬骨は、馬上顎骨3・下顎骨2・牛上顎骨・下顎骨・中足骨・距骨であり馬は臼歯の生え換りつつある2～3才馬、臼歯の磨耗が著しい15～16才の老齢馬など4～5頭，牛は1頭で6～7才の小型牛であると推定される[②]。D1号土坑の獣骨は、御代田町野火付遺跡の土坑墓に伴って検出された平安時代の5頭の埋葬馬と違い、頭部の部分がほとんどで、その出土状態から異彩な感を受ける。今後の整理報告書作成においてその性格を特に注意して追求していきたい。

池畑遺跡の西方約300mの台地上に所在する西御堂遺跡においては、住居址等の遺構は検出されず、土坑が2基検出されたのみである。このうちD2号土坑は、底面・周囲に粘土が貼りめぐらされており、当初、何に使用されていたのか不明であったが、地元の人の話によると、戦前までこのような形の肥溜がつくられていたということである。

最後に、無事完了まで発掘調査を遂行して下さった調査参加者の皆さんをはじめ、暖かい御援助、御助力をくださった地元の皆さんに心から感謝の意を表し記してお礼を申し上げます。

注1. 長野県史刊行会笹沢浩氏の所見による。

注2. 群馬県立前橋第2高等学校教諭宮崎重雄氏の鑑定による。

宮下健司氏藤森栄一賞授賞 !!

宮下健司会員が、長野県考古学会秋季大会において、長崎元廣氏とともに第10回藤森栄一賞を受賞された。本会では先に由井会長が受賞されており、本会関係者では2度目の受賞にあたる。氏の研究は広い分野にわたっており、考古学のみならずその研究は民俗学にもおよんでおられる。宮下さんの受賞を皆でお祝いするとともに今後ますますのご活躍をお祈りしたい。

事務局からのお知らせ

○訃　報

佐久考古学会の長年の会員であられた、御代田町栄町の大井豊さんが、昨年12月12日に御逝去されました。享年82歳でした。大井さんの永年にわたる学会活動と御努力に対しまして、深く感謝いたしますとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

○新入会員の紹介

下記の５氏が当会に新しく入会されました。今後ともより一層研究活動の輪をひろげてゆきましょう。

井出智秀　〒384-11　小海町川久保　TEL (0267) 62-3845
池田勝吉郎　〒384-01　佐久市中込　TEL (0267) 62-4390
羽毛田伸博　〒385　佐久市岩村田729　TEL (0267) 67-5491
羽毛田卓也　〒385　佐久市根々井554-1　TEL (0267) 67-4687

（賛助会員）

畠山俊彦　〒384-01　佐久市三塚　TEL (0267) 62-6670
堀川公行　〒384-11　小海町溝原　TEL (0267) 92-3565

○絵はがきあります。

15周年記念事業として作成された絵はがきで、佐久地方の先土器時代からの代表的な資料が掲載されています。まだ、在庫がありますのでご希望の方は事務局まで。１部200円。

後　記

通信第３６号をお届けいたします。原稿をいただいた時は「からっちみ（から凍）」の頃でしたが、日差しも一段と春めいてきた今日此頃です。遅刊は、偏に編集者によるもので深くお詫び申し上げます。さて、本号は１５周年記念祝典の記事、旅行記に加え、埋文センターから発掘の概報をいただき、中身の濃いものになったと我田引水ながら密かに？自負いたしております。次号は、従来の資料紹介のほか、ミニ講座なども加え、より充実したものにして行きたいと考えています。ご期待いただくとともに、会員の皆さんからの投稿をお待ちしております。　（Ｈ．Ｈ）

佐久考古通信No.36号
発行所：佐久考古学会
長野県佐久市岩村田1040～7
木内　捷方（〒385）
TEL　0267-68-0617
発行者：由井　茂也
編集者：井出正義（編集長）　高村　福島
森泉　三石　小山　堤　花岡

佐久考古通信

No. 37
1986. 7. 1
佐久考古学会

目　　次

昭和61年度佐久考古学会総会次第 …… 2
佐久考古学会会則改正報告 …… 2
昭和60年度佐久考古学会会務報告 …… 3
昭和61年度佐久考古学会事業計画 …… 4
昭和60年度会計決算 …… 5
佐久考古学会15周年記念式典会計報告 …… 6
昭和61年度会計予算 …… 6
新役員の紹介 …… 7
長野県考古学会地区委員選出 …… 7
事務局変更のお知らせ …… 7
研修旅行案内 …… 8
編集後記 …… 8

昭和61年度佐久考古学会総会（宮下健司氏による講演会）

昭和61年度佐久考古学会総会次第

1. 日　　時　　昭和61年5月25日(日)　午後2時
2. 場　　所　　佐久市役所6階会議室
3. 日　　程　　1）開会のことば
   2）会長あいさつ
   3）感謝状授与
   4）日程説明
   5）議長選出
   6）議　　事
   第1号議案　昭和60年度佐久考古学会会務・決算・会計監査報告及び承認の件
   第2号議案　佐久考古学会会則改正の件
   第3号議案　役員改選の件
   第4号議案　昭和61年度佐久考古学会事業計画・会計予算承認の件
   7）新旧役員あいさつ
   8）県考古学会地区委員選出の件
   9）そ　の　他
   10）閉会のことば
4. 講演会　　「縄文草創期をめぐって」
   講師　宮下健司先生(長野県史刊行会専門主事)
5. 懇親会及び旧事務局長慰労会
   会　　場　　レストラン「かしわ」

佐久考古学会会則改正報告

現　行	改　正
第5条	**第5条**
1. 会　　費	1. 会　　費
ア　一般会員　1）個人　年額　3,000円	ア　一般会員　1）個人　年額　4,000円
2）団体　年額　3,000円	2）団体　年額　4,000円
イ　賛助会員　3,000円	イ　賛助会員　4,000円

第 6 条	**第 6 条**
1 のウ	1 のウ
事務局(若干名)	事務局幹事(若干名)
事務局長 1 名と幹事若干名で構成し，会務を執行する。	事務局幹事長 1 名と幹事若干名で構成し，会務を執行する。
事務局長：事務局を代表し，会務の執行を統轄する。	事務局幹事長：事務局を代表し，会務の執行を統轄する。
事務局幹事：会計幹事，書記幹事等その他必要な幹事。	事務局幹事：会計，書記等その他必要な会務を担当する。
3. 会長，副会長，事務局幹事，委員，会計監査員の選出は総会においてするものとする。又，事務局幹事は総会または役員会の承認を得て，事務局長が任命するものとする。	3. 会長，副会長，事務局幹事，委員，会計監査員の選出は総会においてするものとする。又，事務局幹事長は，幹事会の互選により選出する。

昭和 60 年度佐久考古学会会務報告

1. 会務の経緯

昭和 60 年(1985)

5 月 26 日

＜総　会＞　佐久市役所にて昭和59年度総会を開催し，役員の改選を行う。

＜講演会＞　総会の後，御代田町教育委員会，堤隆講師による「野火付遺跡の歴史時代の様相」と題する講演を行う。

＜懇親会＞　講演会の後，市役所食堂にて親交を深める。

7 月 5 日

＜ 15 周年記念祝典実行委員会＞　埋文センターにて，祝典参加者，講演会講師，記念絵ハガキ等についての話し合いをおこなう。

7 月 13 日

＜例　会＞　埋文センターにて，研修旅行の件，矢出川保存対策の件等についての話し合いをおこなう。

7 月 26 日

＜実行委員会＞　案内状の送付者名簿の作成，記念絵ハガキについてのことなどを話し合う。

8 月 24 日

＜矢出川小委員会＞　矢出川湿原における動物園建設問題について話し合い，南牧村に対して抗議文，動物園へ要望書を送付することを決定する。

9 月 22 日～ 23 日

＜研修旅行＞　「上総国の埴輪を求めて」の研修旅行を行う。

10 月 6 日

＜役員会＞　特に 15 周年記念祝典について話し合い，最後のつめを行う。

10月12日

＜15周年記念祝典＞　佐久市役所にて15周年記念祝典を盛大に行う。シンボルマークは，浅沼馨氏のものが選ばれ，祝典後に筑波大学教授岩崎卓也氏，千曲川古代文化研究所主幹森島稔氏らによる講演が行われた。又，講演終了後，一階食堂にて祝宴が開かれた。

11月9日

＜例　会＞

12月14日

＜矢出川小委員会＞　野辺山の大規模土地改良問題等について話し合う。

昭和61年（1986）

1月1日　通信No.36発行

1月21日

＜見学会＞　長野市信濃美術館「敦煌展」の見学会を行う。

1月25日

＜例　会＞

＜新年会＞　中込「竜門」において新年会を行う。

2月8日

＜例　会＞　埋文センターにて，佐久考古学会記念論集第1集（「赤い土器」）について話し合う。

3月8日

＜例　会＞　埋文センターにて，矢出川保存運動の現状についての報告等をうける。

4月12日

＜例会・臨時役員会＞　埋文センターにて役員人事の件，総会の件等について話し合う。

4月25日

＜幹事会＞　井出正義氏宅において，総会に向けての下準備を行う。

5月14日

＜役員会＞　埋文センターにて役員改選，総会準備等を行う。

昭和61年度佐久考古学会事業計画

1. 総　　会

5月25日(日)　佐久市役所

2. 例　　会

6月14日(土)　埋文センター

7月12日(土)　埋文センター

10月11日(土)　埋文センター

11月8日(土)　埋文センター

12月13日(土)　埋文センター，忘年会も兼ねる。

昭和62年

1月24日(土)　埋文センター，新年会も兼ねる。

2月14日(土)　埋文センター

3月14日(土)　埋文センター

4月11日(土)　埋文センター

5月

3. 役 員 会　随　時

4. 通　　信　No.37～41

5. 研修旅行　9月頃に北陸へ

6. 講 演 会　5月25日(日)

佐久市役所にて宮下健司氏による「縄文草創期をめぐって」と題する講演を行う。

7. 保存運動　矢出川遺跡群に関して
8. 会　　議　事務局幹事会，編集会議等は随時行う。
9. 研究報告　佐久考古学会研究報告書第1集発刊の準備

昭和60年度会計決算

収入の部

単位　円

項目		本年度決算額	本年度決算額	比較	説明
1 繰越金	1）繰越金	45,076	45,076	0	
2 会費	1）会費	206,500	189,000	△17,500	45人　1人 団体 1人 賛助会員
3 書籍売上金	1）書籍売上金	25,000	48,200	23,200	
4 雑入	1）雑入	3,424	0	△ 3,424	
合計		280,000	282,276	2,276	

支出の部

項目		本年度予算額	本年度決算額	比較	説明
1 報酬	1）謝礼	5,000	5,000	0	
2 需用費	1）印刷費	40,000	41,840	1,840	通信3回
	2）消耗品費	20,000	11,750	△ 8,250	
	3）食料費	40,000	10,120	△29,880	
3 通信費	1）通信費	30,000	16,205	△13,795	
4 事務局費	1）事務局費	20,000	6,920	△18,080	
5 慶弔費	1）慶弔費	10,000	9,000	△ 1,000	
6 繰出金	1）繰出金	110,000	110,000	0	
合計		280,000	282,276	69,165	

支出残高分　69,165
＋収入増額分　2,276
残　　高　441

残高71,441円は，昭和61年度予算へ繰越。

佐久考古学会15周年記念式典会計報告

収　入

項　目	金　額
繰　入(学会より)	110,000
繰　入(赤い土器)	100,000
祝宴，宿泊費	252,500
祝　儀	108,000
雑　入(書籍売上等)	95,720
小 計 A	666,220

支　出

項　目	金　額
印刷費(案内状，絵ハガキ)	198,382
通信費	17,000
講師謝礼	100,000
賞　金	10,000
祝宴，宿泊費	258,250
消耗品費	8,710
予備費(食料費等　タクシー，写真)	71,000
小 計 B	663,342

A － B ＝ 2,878

昭和61年度会計予算

収入の部

項　目		本年度予算額	前年度予算額	比　較	説　明
1 繰越金	1) 繰越金	71,441	45,076	26,365	
2 会　費	1) 会　費	200,000	206,500	△ 6,500	50人
3 書籍売上金	1) 書籍売上金	20,000	25,000	△ 5,000	
4 雑　入	1) 雑　入	8,559	3,424	5,135	
合　計		300,000	280,000	20,000	

支出の部

項　目		本年度予算額	前年度予算額	比　較	説　明
1 報　酬	1) 謝　礼	5,000	5,000	0	
2 需用費	1) 印刷費	100,000	40,000	60,000	4回　1回25,000
	2) 消耗品費	20,000	20,000	0	
	3) 食料費	0	40,000	△40,000	
3 通信費	1) 通信費	30,000	30,000	0	
4 事務局費	1) 事務局費	50,000	25,000	25,000	食料費含む
5 慶弔費	1) 慶弔費	10,000	10,000	0	
6 繰出金	1) 繰出金	85,000	110,000	△25,000	赤い土器印刷費
合　計		300,000	280,000	20,000	

新 役 員 の 紹 介

会　　長　由井茂也

副 会 長　黒岩忠男　白倉盛男

事務局幹事

幹事長　井出正義

書　記　島田恵子，三石宗一

会　計　小山岳夫

通　信　福島邦男，花岡　弘，堤　　隆
　　羽毛田卓也

研究誌　臼田武正，福島邦男，花岡　弘
　　林　幸彦，高村博文，堤　　隆

企　画　井出正義，林　幸彦，高村博文
　　三石宗一，羽毛田卓也

会計監査　井上行雄，由井　明

地区委員

Ⅰ 地 区（軽井沢，御代田，小諸）
　　荻原範仁，田中

Ⅱ 地 区（北御牧，浅科，立科，望月）
　　掛川喜四郎，倉見　渡

Ⅲ 地 区（佐久市）
　　井上行雄，大井今朝太，佐藤敏

Ⅳ 地 区（臼田，佐久町，八千穂，小海）
　　三石延雄，佐々木宗昭

Ⅴ 地 区（北相木，南相木，川上）
　　由井　明，土屋忠芳

Ⅵ 地 区（佐久地域以外の地区）
　　森泉かよ子

長野県考古学会地区委員選出の件

◦研究委員として　　三 石 宗 一

◦埋文委員として　　羽毛田 卓 也

事 務 局 変 更 の お 知 ら せ

木内事務局長退任により，事務局の所在が新事務局幹事長　井出正義方に変更しましたのでお知らせします。

佐 久 考 古 学 会 事 務 局
南佐久郡小海町東馬流 5047
井　出　正　義　方
TEL（0267）92-3171

研修旅行案内　「越前国一乗谷」

最近，大井城跡・野火付遺跡・石堂遺跡・前田遺跡(第2次)・後平遺跡と佐久地方中世の発掘調査が相次いでいます。かつて佐久ではお目にかからなかった遺構の検出や，青磁・白磁・常滑などの陶磁器類や多量の石臼の出土など初めての経験に途惑うことが多いかと思います。そこで，本年は中世の代表的な遺跡である越前国一乗谷朝倉氏遺跡を訪れようと研修旅行を企画しました。会員の皆さん，ふるってご参加下さい。

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は，越前国を支配した戦国大名朝倉氏の5代103年間におよぶ居城の跡として知られ,福井市街東南10kmの一乗谷にあります。谷の木戸の内部に浅倉義景館を中心とした多くの家臣の館や寺院・屋敷の跡が良く残っている。谷の東の一乗城山には15個所の郭を中心とした山城が存在している。

昭和42年より発掘調査と環境整備事業が進められている。その結果，文献史料とも関連させつつ「戦国城下町」とも呼びうる近世城下町の先駆的形態を考古学的に実施しつつある。

— 考古学ジャーナルNo.182, 1980 より

- **日程**　9月15日，16日
- **宿泊所**　神明旅館(福井市)
- **見学場所**　一乗谷朝倉氏遺跡を中心として
- 出欠の有無は，通信着後直ちに連絡して下さい。
- **連絡先**　佐久埋蔵文化財調査センター内
  三石・小山(0267-63-2394)
  佐久市埋蔵文化財資料室内
  林・羽毛田(0267-62-6121)

≪編集後記≫

予定より遅れましたが，佐久考古通信No.37をお届けいたします。今年は福島，花岡，堤羽毛田が担当することとなりました。よろしくお願いいたします。現在各地で発掘調査が行われています。次号あたりから現場の進行状況等を報告していきたいと思います。

今回は先日開催された総会の報告が中心となりましたが，次回以降会員皆様の原稿等お待ちしていますので，事務局へお寄せ下さい。

佐久考古通信 No.37

発行所　佐久考古学会(転局)
南佐久郡小海町東馬流5047
井出正義方
TEL(0267)92-3171

発行者　田井　茂也

編集者　井出・福島・花岡・堤羽毛田

佐久考古通信

No.38・39 合併号
1986. 12. 30
佐久考古学会

目　　次

佐久市前田遺跡・鋳師屋遺跡第二次発掘調査速報 …… 1
佐久市深堀遺跡群南鷺の宮遺跡の表採資料 …… 羽毛田卓也 …… 2
一乗谷　朝倉氏遺跡を尋ねて …… 佐々木宗昭 …… 4
関越道の発掘調査始まる …… 臼田　武正 …… 6
須恵器研究会発足 …… 8
新入会員紹介 …… 8
編集後記 …… 8

佐久市前田遺跡・鋳師屋遺跡第二次発掘調査速報

今年度4月より佐久市教育委員会が主体となり調査を進めていた両遺跡ですが，10月をもって終了しました。

鋳師屋遺跡

竪穴住居址（古墳～平安時代）　18軒
掘立柱建物址（古墳～平安時代）　15軒
小竪穴状遺構（中世）　6軒
土坑（中世）　138基
溝状遺構（中世～近世）　15条

前田遺跡

竪穴住居址（古墳～平安時代）　56軒
掘立柱建物址（古墳？～平安時代）　38軒
小竪穴状遺構（中世）　54軒
土坑（中世）　480基
火葬墓（1基）・石組土坑墓（2基）
木棺土坑墓（1基）・土坑墓（1基）
埋葬馬土坑（1基）を含む。
井戸址（平安時代～中世）　4基

等の遺構が検出された。

出土遺物は，古墳時代から平安時代の土師器・須恵器・鉄製品（鎌他数点）と，中世の内耳土器・陶磁器・鉄製品・銅製品・北宋銭・石臼・擂鉢・石錘・敲石・磨石・不明土製品・特殊石製品・馬骨・人骨・炭化米・炭化材など，ダンボールにして約120箱分です。

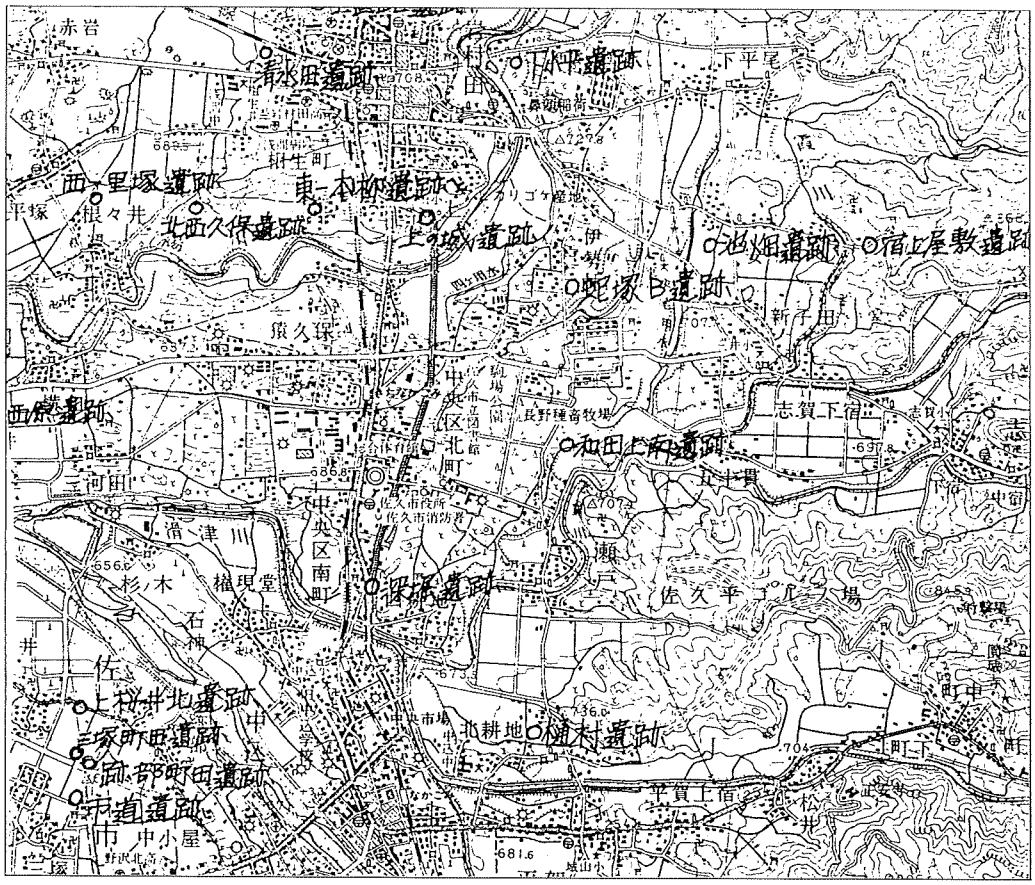
今回の調査では，当初の予想をはるかに上回る中世の土坑群・ピット群・小竪穴状遺構が複雑に重なり切り合って検出された。中でも土坑群中より検出された中世の火葬墓は，直径50～80cmの石が四個組まれ，焼土・炭化材・炭化

物・骨紛が60cm近く堆積していた。墓内からは，200以上の骨片と6枚の北宋銭が出土した。炭化材は5～10cm径の丸太で，意識的な配置が考えられる。なお石の表面はかなり焼け亀裂を生じていた。

最後に，調査終了まで作業に従事して下さった方々，及び御協力・御教示をいただいた諸氏・諸先生方に心より感謝の意を表しお礼申し上げます。

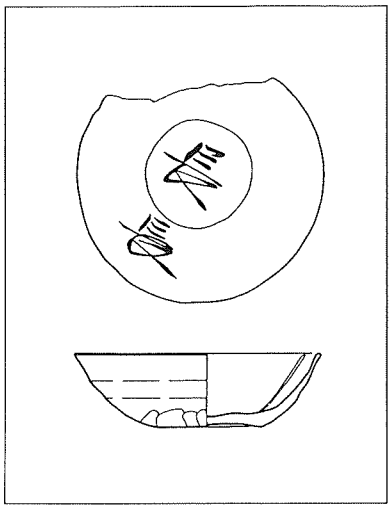
佐久市深堀遺跡群南鷺の宮遺跡の表採資料

羽毛田　卓　也



第1図　表採位置，周辺遺跡図

南鷺の宮遺跡は，弥生時代中期後半の遺跡として名高い深堀遺跡を含む深堀遺跡群の東側端に位置する。場所は，佐久市のほぼ中央，佐久市役所の東800メートル，志賀川を見降ろす比高15メートルの台地東南端，標高689メートルに位置する。周囲には，和田上南遺跡（昭和54

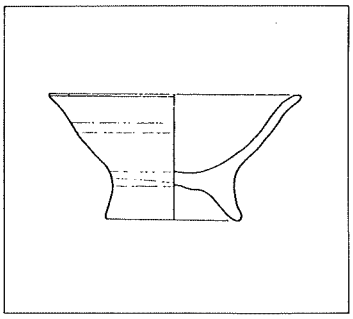


第2図　墨書土器(坏)実測図(1：4)

年度一部発掘調査)，樋村遺跡(昭和57・58年度発掘調査)，屋敷古墳群，中条峯古墳群，寄山遺跡群(寄山古墳)，東久保古墳などが隣接する。

ここに紹介する遺物二点は，台地最東南端の断崖よる数メートルの位置にあったと考えられる住居址より表採した。本住居址は，宅地造成のための重機による破壊を受けており，床と思われる部分が露出していた。坏(墨書土器)は東側のピット状の落ち込み，高台付坏は中央の床面に散乱していた。なお，造成地内で本住居址の他，二棟の住居址プランを辛うじて確認することができた。

坏は，回転糸切りの平底から内彎気味に立ち上がり，口縁でやや外反する器形を有している。外面は，ロクロ横ナデで底部周辺にヘラ削りが施されている。内面は黒色研磨で，十字に暗文



第3図　高台付坏実測図(1：4)

が施されている。墨書は，底部と体部の二ケ所に「長」と書かれている。墨書の残り状況は良好で細かい所まで明確に内眼視できる。

高台付坏は，高台部がやや外反し，坏部で集約された後，直線的に立ち上がり，口縁で外反する器を有している。内外面ともにロクロ横ナデが施され，器形の三分の一が欠損している。

坏・高台付坏共に，表採後接合した資料で，割れ口が新しく，重機により破損したと考えられる。

南鷺の宮遺跡の台地南端部は完全に消失し，一軒の家と二軒分の造成区画地となってしまった。この様に一度破壊を被った埋蔵文化財は，二度と元に戻す事はできず，遺物を事後に確認するのがやっとである。確かに佐久という所はどこを掘っても埋蔵文化財にぶつかる特殊な地域ではある。破壊を未然に防ぐ事は大変に困難ではある。工事現場で目を止めるのは私だけではないだろう。今回は何とも後味の悪い資料紹介となってしまったが，以上で終りたいと思う。

● 例会のお知らせ

今年度の例会を下記の内容中心に行う。

1月24日(土) 弥生時代墓制について　高村博文
2月14日(土) 弥生の金属器について　臼田武正
3月14日(土) 赤い土器の研究史　小山岳夫
4月11日(土) 弥生住居の総合研究　林　幸彦

一乗谷　朝倉氏遺跡を尋ねて

佐々木　宗　昭

去る9月15・16日恒例の佐久考古学会の研修旅行が行なわれました。今年は福井県の一乗谷に所在する「朝倉氏遺跡」を研修する旅でした。

今回この遺跡を尋ねるべく計画をしたその背景には，近年佐久平においても大井城跡を始め小諸，御代田等の各地で中世の遺構が検出されつつあり，そこで是非，中世の遺跡を代表する朝倉氏遺跡を見学してみようと言うことになった訳です。

さて当日，いまにでも降りそうな雨雲を見上げ，AM6：00　埋文資料室を出発する。

この雨雲を見ると，平素の行ないの悪い者が誰か居るに違いない……。

小海を過ぎたあたりで早くもビール，酒，ウイスキーの栓が抜かれ，車中が賑い始める。

しかし，すでに最前部の席はことの外騒然としている。どうやら此の辺に，先きの空模様を占う人物が居そうである……。やがて，車は野辺山へと差しかかり，某ドライブインにて○○○タイムの予定，しかし，時間が早すぎ使用できない。よって一同，裏へ巡り壮快な気分となる。それにしても調査中に見慣れてはいるものの，朝霧の中でのその姿，格好は何とも言えず，ただ閉口のみ……。まさに『十人十色』ならぬ，「じゅうにんといろ」である。

つまらぬ酒落はさておき，野辺山にて由井会長，由井　明さんが乗車し，今回の旅行者一行20名が揃う。

今回の道順は，小淵沢インターより中央道に入り，米原を経由し北陸自動車道から福井へと向かう順であった。途中，井出先生はじめ各先生方より，歴史にその名を馳せた名勝，武将等のガイドがあり，その度に，車窓より広がる山河に，古代への遥かなる思いを描き，そして又古代人らが旅の安全に幣を手向けたであろう峠の峰々を見晴るかし，車は順調に一路福井へと向かう。

東名高速を過ぎ，米原から北陸自動車道を走る頃より，雨雲が切れ，青空が広がり始める。

どうやら車中には雨男は居そうにもなく，いたって平素の行ないは良かったものと思われる。

やがて車窓の左側より，敦賀湾が見え，北陸路を走る実感と共に，目的地まであとわずかであることを知る。

PM12：30　予定より約1時間30分早く一乗谷朝倉氏資料館に到着。ここで県教育委員会の仁科　章氏の案内のもと館内を巡る。さすがに北陸の「中世都市」と言われる遺跡からの出土遺物である。日常の食膳，調理具，そして又，日々の生活用具としては欠かせなかったであろう「石臼」，更には遊戯具の一つである将棋の駒（177枚，6セット分以上）などが出土している。他に，茶道や香道などもいとなまれていた様で，茶臼などの出土品もある。

此れ等の出土品を見ると，「戦国」という殺伐としたイメージからは，想像もつかない温和で，睦びやかな生活の業が営まれていたようである。さて，此の資料館より，約数キロ離れた所に目的地である朝倉氏遺跡がある。此は言うまでもなく，戦国時代に越前国守であった朝倉氏の本拠地である。

昭和42年より発掘調査が行なわれ，今なお調査中の遺跡であり，特別史跡となっている。一乗谷川に沿って，帯状に細長く広がる狭い平地と，その両側にそびえる広大な山稜に展開する遺跡である。平地には幅4.5ｍの幹道がおかれ，その両側に，居館，武家屋敷，寺院等が並ぶ町並であった。このことは発掘された土塁，礎石等からして瞭然たるものであり，私達はこの幹道を，まるで観光用に整備された遊歩道でも歩いているかの様な錯覚をもって見学している。

ましてや，その片側に配された溝なぞは，せせらぎの音が聞こえるかのようである。しかし，往時は此の道を商人が行き交い，そして又，武士達が往還したであろう。そんなことをしばし忘れるほど，あまりにも当時のそのままの原形を残し，今日に発掘された遺跡である。又，庭園も大変興味深く，当時においては，屋敷の構成上欠くことのできなかったものであるらしい。

仁科氏の説明によると，本館庭園は完全に埋没していたが，滝石組や，池底の敷石などが発掘され，豪快華麗な作風をおび，桃山調の庭園様式が感じられるとのことであった。

一方，これらの町並が遺在している狭い平地を三方から取り囲む形で形成される山稜には，山城，砦，櫓などが，自然地形を巧みに利用して築かれており，一乗谷朝倉氏の一大戦国城下町が形成されていたようである。

いずれにしても，想像していた以上に刺激度の多大な遺跡であり，山腹に配せられた「諏訪庭園」に向かう途中の高台より眼下に映る朝倉館の整然たる礎石と，その背後に迫る山稜にうっそうと茂る孟宗竹が，初秋の風に揺蕩くもなびくその様は，栄華を誇ったであろう往時を一層

偲ばせるかのようであった。

こうして強烈な印象を残しつつ，朝倉館の西門で記念写真を残し，次の目的地である永平寺へと向かい第１日目が無事終了した。

夜は仁科氏を交え，懇親会が開催され，その後，福井の夜を散策した人達もいたようであり，はたまた数人の人は，徹夜で○○○○に興じたようであった。

第２日目は，国定公園である越前海岸を通り，越前焼を見学して帰路につく予定であった。

晴れわたる越前岬を見ていると，昨夜の睡眠不足がたたっているのか，海中に吸い込まれそうな感じである。『白鳥や悲しからずや……』の詩がうかび，あの透き通る様な秋の日差と，澄みきった空の青，海の藍さに全てが染まってしまいそうである……？

そんな越前海岸から車は，やがて離れ，峠へとさしかかる。そして，その峠を越した所に越前焼の産地がある。あいにく焼窯は閉ざされており，見学はできなかったが，展示会館において，各々お土産品を特選し，最後の研修地を後にした。

ＰＭ６：30　一乗谷での大きな刺激と共に，あの永平寺での貴重な体験，「ミホトケノオミチビキ」により，無事，つつがなく今回の研修旅行が終了し，佐久に到着したことに感謝し，紀行文をﾒたい。

関越道の発掘調査始まる

臼田武正

新聞報道等で既にご存知の方もいることと思いますが，いよいよ佐久市において，関越自動車道上越線建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査が実施される運びとなりました。調査は，日本道路公団の委託を受けた県教育委員会が㈶長野県埋蔵文化財センターに再委託して行うもので，10月1日に佐久調査事務所が開設され，６日に鍬入式が行われました。

今年度は，10月13日から12月26日までの期間を，用地買収が済んだ岩村田地区の佐久インター部分（仙禄湖東側）に所在する栗毛坂遺跡群（第１図）6,000㎡を対象に，調査研究員５名，事務職員１名（いずれも松塩筑調査事務所から内部異動），作業員55名の体制で実施します。

岩村田地区は，これまでに佐久市教育委員会によって行われた発掘調査結果が示すように，弥生時代から平安時代の集落遺跡が濃密に分布する地域で，最近では，中世以降の遺構・遺物も多数発見されるようになってきました。

このような環境の中で行われる関越道の発掘調査は，単に記録保存を目的とした資料の蓄積でなく，佐久地方の原始から中世に至る生々しい歴史と文化の実態を，地元の人たちはもとより，広く一般に普及公開し継承していく使命の一端を担っているものと考えます。

今後，この発掘調査は，確認調査をして確定すべき部分も含め，香坂地区（トンネル坑口）から岩村田地区（インター）までの間に26遺跡約30

万m²が実施の予定となっています。

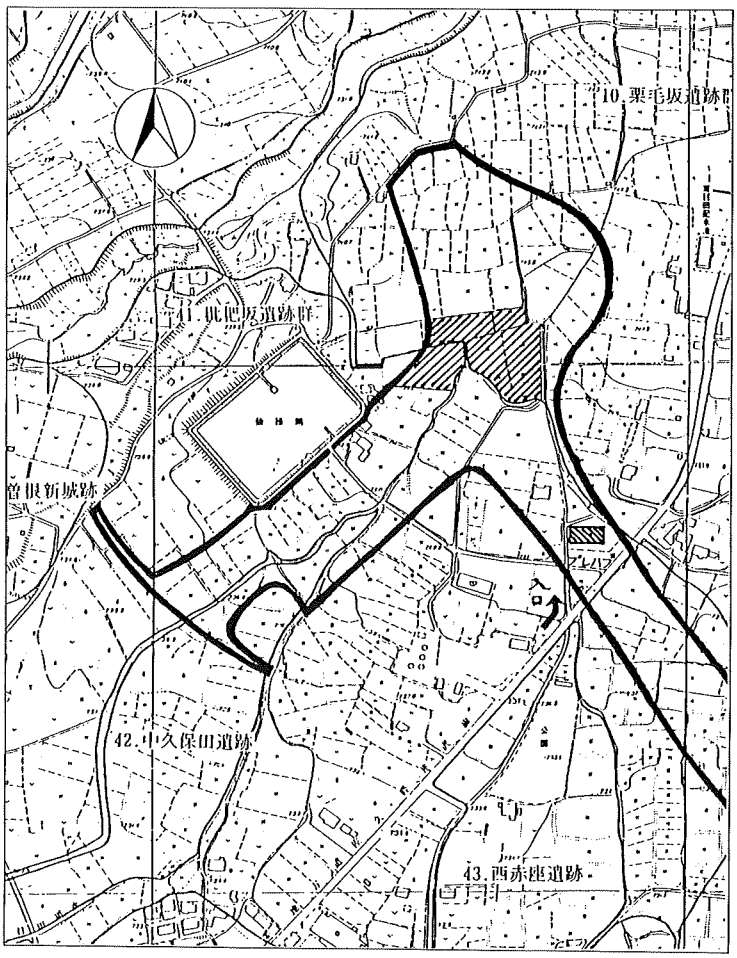
昭和67年度佐久インター開通目標に合わせ，発掘・整理・報告書刊行に至る一連の大事業を成し遂げるためには，内部努力はもちろんのこと，地元関係機関や関係団体との連携が不可欠で，とりわけ佐久考古学会ならびに会員の皆さんには，絶大なご支援をお願いしたいと思っています。

調査事務所は，当面，岩村田の佐久高校前にある長野県高速道事務所敷地内に開設されていますが，現在，新たに鼻顔稲荷の上に用地を確保して正式な事務所を建設中ですので，いずれ移転する予定です。

なお，発掘現場近く（仙禄湖入口）にもプレハブの現場事務所を設置しましたので，お気軽にお立寄りの上，ご指導ご助言いただければ幸いです。

以上，調査を担当する者のひとりとして，会員の立場からの関越道に関わる発掘調査の概要説明とします。

（佐久調査事務所 TEL 68－4924）



第4図　発掘現場位置図

須恵器研究会発足！―― 参加募集中

長野県考古学会の研究活動委員会では，須恵器研究を下記のとおり行うことになりました。

佐久地方には，御牧原窯址群があり，また，集落址からも資料がたくさん出土しています。

そこで，佐久地方においても地域の編年をまとめるため会員の積極的なご参加をお願いします。

テーマ　「信濃における奈良・平安時代の須恵器研究」（7 世紀（645年）以降）

来年の秋をめどに 1 冊の本とし，できればシンポジウムを開く。

内　容　各論　各地域の須恵器の編年研究（窯址の報告を含む）
　　まとめ

佐久平では，佐久市石附窯址，御牧原窯址群の資料を中心に集落址出土資料を加え編年を行ていきたい。

希望者は，事務局まで。

問い合せ先　福島邦男　（0267）53－4150　　花岡　弘　（0267）23－5797

新入会員紹介……よ ろ し く ！

篠原　浩江　〒384－22　北佐久郡立科町茂田井 1611－4　（電話）0267 － 53 － 2433

田中正治郎　〒384　小諸市加増　大日荘　（電話）0267 － 23 － 7786

角張　淳一　〒384　小諸市甲 46 － 10　（電話）0267 － 22 － 8495

田村　祐子　〒328　栃木県栃木市片柳町 1－6－14　片柳寮　（電話）0268－23－1363
24－9611

▶ 編 集 後 記 ◀

通信№38・39をお届けいたします。早目に原稿を頂いた方，遅れて申し訳ありません。

前号から紙面を一掃し，より見易いものになったと考えております。

今年各地で行なわれた調査の概報は数回にわたり掲載の予定です。

なお，資料紹介等，原稿を募集しておりますので奮ってご投稿下さい。　（ひ）

佐久考古通信 No. 38・39

発行所　佐久考古学会（転局）
南佐久郡小海町東馬流 5047
井 出 正 義 方
TEL（0267）92-3171

発行者　由井　茂也

編集者　井出・福島・花岡・堤
羽毛田

佐久考古通信

No. 40 号
1987. 3. 30
佐久考古学会

目　　次

佐久町・後平遺跡 …… 島田　恵子 …… 1
西片ケ上遺跡とその周辺 …… 羽毛田伸博 …… 2
前田遺跡における八世紀代土器群の編年的予察 …… 堤　　隆 …… 3
宿上屋敷遺跡 …… 三石　宗一 …… 5
下川原・光明寺遺跡の調査－検出された中世遺構と安養寺－ 小山　岳夫 …… 6
事務局からのお知らせ …… 8
編集後記 …… 8

佐久町・後平遺跡

島田恵子

南佐久郡佐久町大日向に所在する後平遺跡は昭和59年試掘調査を行ない，翌60年第1次発掘調査，61年第2次調査を続行した。遺跡の紹介は『長野県埋蔵文化財ニュースNo. 18』に記載されているため重複するので，今回は報告書作成終了後にあたり，その結果明らかになった成果について紹介したい。

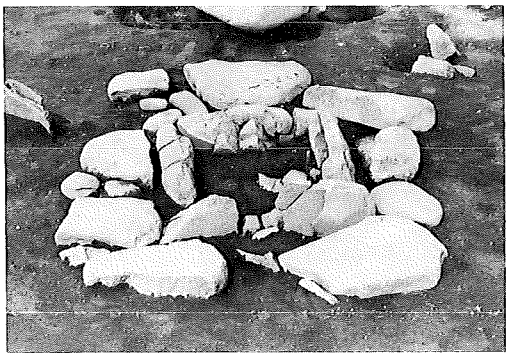
先ず，縄文時代早期中葉～前期初頭にかけての遺構は，特殊遺構4基，落し穴22基，その他土坑80基，住居址3棟等が検出された。遺物の出土は，土器・石器等数量的に同比重であった。土器は破片がほとんどであったが，型式学的な面から，早期中葉～前期初頭における編年を組み立てることが可能となった。該期の土器は長野県下においては資料が少ないため，不明な点が多く判然としなかったが，最近，少量ではあるが新資料が増加したこともあって，徐々に明らかになりつつある。後平遺跡の編年を軸に，今後ますます発展，修正していただけたらと願っている。

また，石器も形態分類を試み，生活の中でどのように使われたか等，勇を鼓したまとめを行なった。いずれにしても土器や石器は，人間が作ったものである。その用途を考えることがの

土製かんざし

ぞかれ，形や調整の方法を論じた報告書がほとんどでは，片手落であるといえよう。

さらに，南佐久郡下では初見である縄文後期最末期の住居址１棟を検出した。写真に図示した土製かんざし，二重の石囲い炉等，やはり検出例の少ない該期の住居址は，今後の好資料となり得るであろう。土器は東北系の瘤付土器の影響もあるが，ローカル色が濃い。



二重の石囲い炉

また，今まで伝承の中にあった，楯六郎・矢田義清の牧場経営に関連する遺構の一部分が偶然に発見された。限られた地区内での調査であったため，広大な牧のほんの一端では不充分な調査とならざるを得なかったが，歴史的伝承を現地に確認したことは，なによりも大きな成果といえよう。

西片ケ上遺跡とその周辺遺跡

羽毛田　伸　博

昭和61年11月に発掘調査を行った，西片ケ上遺跡は佐久市香坂に位置し，標高842ｍを測る。

地形は北に阿伽流山山麓が連なり，その山脚上の緩い傾斜面上で，八風山や矢川峠及び寄石山に源を発する香坂川に流れこむ，浅い沢によって区切られた，北側の崖推堆積上に殆んどが立地しており，比高差は約10ｍを測る。

周囲には，曲尾Ⅰ遺跡（昭和61年９月崖推堆積上と台地上の先端傾斜面発掘調査），曲尾Ⅲ遺跡（昭和61年９月台地上先端発掘調査），屋敷前遺跡（昭和61年10月崖推堆積上発掘調査），淡淵遺跡（昭和61年10月崖推堆積上発掘調査），茂内口・樽ケ沢遺跡（昭和61年11月台地上発掘調査），五斗代Ｂ遺跡（昭和55年度発掘調査），兵士山遺跡（昭和54年度発掘調査），これらの遺跡は部分的な発掘のため，遺跡の全容はつかめないが，崖推堆積上には殆んど遺構がなく，平安時代の住居址が兵士山遺跡，曲尾Ⅲ遺跡から１棟づつ，茂内口遺跡から３棟検出され，香坂川北側に山地集落が上流に向かって点在していた可能性が強く感じられる。五斗代Ｂからは縄文早期～後期の遺物と平安時代の遺物が出土しており，遺構としては縄文時代の礫群が検出された。また，曲尾遺跡においては，縄文中期後葉～後期にかけての遺物が多く表採されており，台地上においては中心部に泉の涌きでている所があり，かなりの密度で縄文時代の遺構が存在すると考えられる。発掘調査の行なわれていない，仙太郎，木戸平Ａ・Ｂ，鶉尾根，鶉尾根北，雨原Ａ・Ｂ遺跡からも主に縄文時代の遺物が多く表採されており，香坂一帯は市内の平坦地と異なった遺跡の様相を示している。

本遺跡の遺構は東側崖推堆積上で土壙４基と

溝状遺構が2条検出されたが，性格，所産期とも不明であった。西側崖推堆積層のない緩い傾斜面上で住居址が1棟，土壙3基が検出されたが，土壙については性格，所産期は判明できなかった。

この住居址について概要を述べると，南方に張り出し部をもった柄鏡形敷石住居址であり，張り出し部と炉が略一直線上に位置しており，主軸方位はN−4°−Wを示す。主体部は東西425cm，南北420cmを測り，略円形を呈す。敷石は主に張り出し部側に三ケ月型に敷きつめられており，他は炉周辺に散在していた。張り出し部は東西150cm，南北190cmを測り，隅丸長方形を呈し，雑ではあるが全面に敷石がなされていた。柱穴は円形壁中形式の様相を示しており，張り出し部と主体部の接合箇所は深く掘り窪められ，立脚した石によって仕切りされ，上に扁平な石が据えられていたが，中からは遺物が出土しなかった。炉においては4枚の扁平な石を4角に据え，中に土器を敷いた，石組埋甕炉であった。これら敷石と炉に用いた石は，本遺跡においては容易に入手できる溶結凝灰岩と玄武岩であった。

遺物については，石組埋甕炉に用いた加曽利E系の系譜をひく深鉢，準三十稲葉式といえる壺形土器に近い深鉢と，他に称名寺式土器片が出土しており，これら系譜の異なる土器片が共存して出土していることは，交易・文化圏を知る上で貴重な資料であろう。その他石鏃2点，横刃型石器，凹石，打製石斧，敲石が出土しているが，総体的に遺物は少なく，祭祀的遺物も出土していないことから，敷石住居址の性格を把握するには資料不足であった。以上，これらの遺物から本遺構の所産期は縄文時代後期初頭と考えておきたい。尚，詳細については，報告書によって後述する。また，本調査が約10mという新設の道路幅の調査であったため1棟検出されたのみであったが，周囲の地形及び表採遺物から察し，他にも敷石住居址の存在する可能性が強い。

前田遺跡における八世紀代土器群の編年的予察

堤　　隆

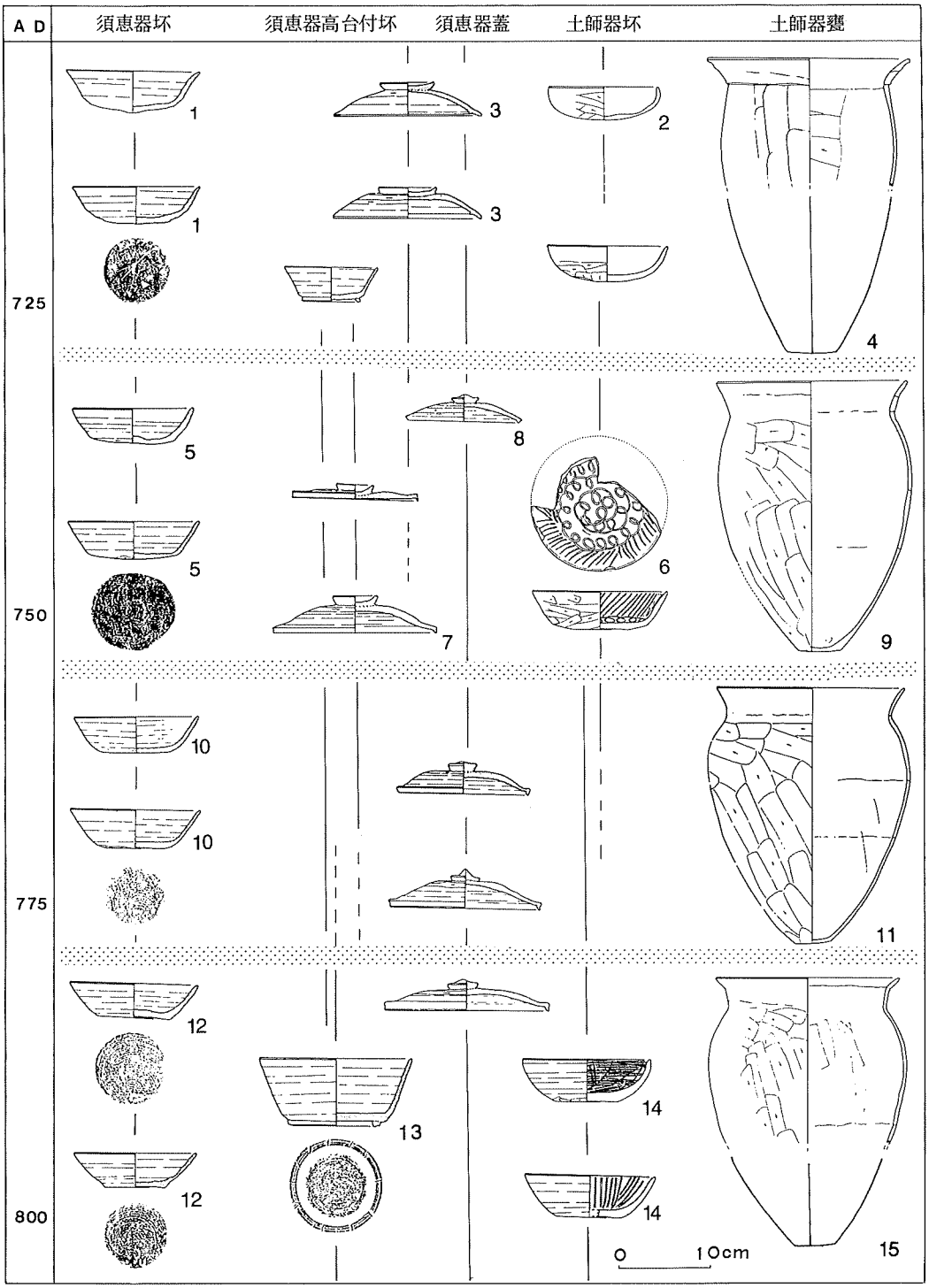
1　はじめに

佐久市小田井・御代田町御代田にかかる鋳師屋遺跡群前田遺跡は，県営圃場整備事業実施に伴い昭和60年に佐久市教育委員会・御代田町教育委員会によって発掘調査がなされた。その結果，八世紀代を中心とする竪穴住居址130軒以上，掘立柱建物址110棟以上が検出され，当該期を語るうえで欠かせない集落遺跡となった。引き続いて現在前田遺跡の遺物整理を進めているが，その過程において八世紀代の土器様相がおおよそ四半世紀単位で四段階に区分でき得ることがしだいに明らかとなってきた。詳細はその発掘調査報告書に述べることとなるが，ここではその概要を紹介してみたい。

2　八世紀代の土器編年（第1図）

◎　八世紀第Ⅰ四半紀中心

底部が丸味を帯びた平底を呈し回転ヘラキリのまま未調整の須恵器坏（1）が土器組成の主体



第1図　前田遺跡における八世紀代の土器編年

を占める。土師器坏では，その当初には古墳時代後期の系譜をひく体部に僅かに稜をとどめる坏もみられ，また，丸底・体部内湾の2も認められる。須恵器蓋では，かえりを有し皿状つまみの3もみられる。土師器長胴甕は，後の時期に比べより器高が高く，最大径が口縁部にあり，外面胴部には一貫して縦方向のヘラケズリが認められるものもある(4)。

◎　八世紀第Ⅱ四半紀中心

土器組成の主体を占める須恵器坏は，回転ヘラキリの後全面手持ちヘラケズリの底部をみせるものが特徴的である(5)。土師器坏では，見込み部にラセン暗文，体部に放射状暗文の施される畿内系の盤状坏が殊にこの時期に特徴的に見出せる(6)。須恵器蓋では，佐波理椀蓋の模放形態(7)や，宝珠つまみ・かえりなしの一般的な形態のもの(8)も見出せる。土師器甕の最大径は口縁部から胴部に移りつつあり，器高も前時期に比べると低くなる(9)。

◎　八世紀第Ⅲ四半紀中心

須恵器坏の底部切り離し手法に回転糸切りが採用されるが，その外周には手持ちヘラケズリがなされるのが特徴的である(10)。土師器甕は最大径が胴部上半にある肩の張る「く」の字状口縁のものである(11)。

◎　八世紀第Ⅳ四半紀中心

回転糸切りのまま未調整の底部をみせる須恵器坏がその組成の主体となる。その形態については回転糸切りにより坏の底部と体部の変換点が明瞭化する特徴も見出せる(12)。須恵器高台付坏では法量の大きい13が顕在化する。また，土師器坏では，ロクロ整形により内面黒色研磨のなされる14もみられるようになる。土師器甕は，「く」の字状口縁から「コ」の字状口縁への変化が認められ，器高も八世紀第Ⅰ四半紀のものと比べると低くなる。その底径も小さくなるようである(15)。

以上，きわめて大把みではあるが，前田遺跡の八世紀代土器群の編年についてふれてみた。

宿　上　屋　敷　遺　跡

三　石　宗　一

宿上屋敷遺跡は，佐久市安原地区，霞川右岸の標高700ｍ内外の台地上に所在し，約700ｍ西方には，昭和60年度に発掘調査が実施され，弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる住居址が2棟検出された筒畑遺跡群池畑遺跡が存在する。今回行われた調査は，佐久建設事務所が行う県道香坂中込線バイパス改良工事事業(高速道路関連工事専用道路)に伴なう調査であり，遺跡の存在する台地の南端部について，幅約10ｍと限られた範囲での調査である。

検出された遺構は，竪穴住居址6棟，特殊遺構3基，土坑9基であるが，調査区が幅約10mと限られており，さらに昭和47年度に行われた圃場整備事業の際に，埋土，農道の新設等が行われているため，6棟の住居址はいずれも全容を知り得ず，床面付近まで破壊を受けている状態であった。

検出された6棟の住居址は次の5時期に分け

られる。

4世紀代（古墳時代前期）---------- H1・6

7世紀代（古墳時代後期後半）？---------- H3

8世紀末～9世紀前葉（平安時代前葉）------- H2

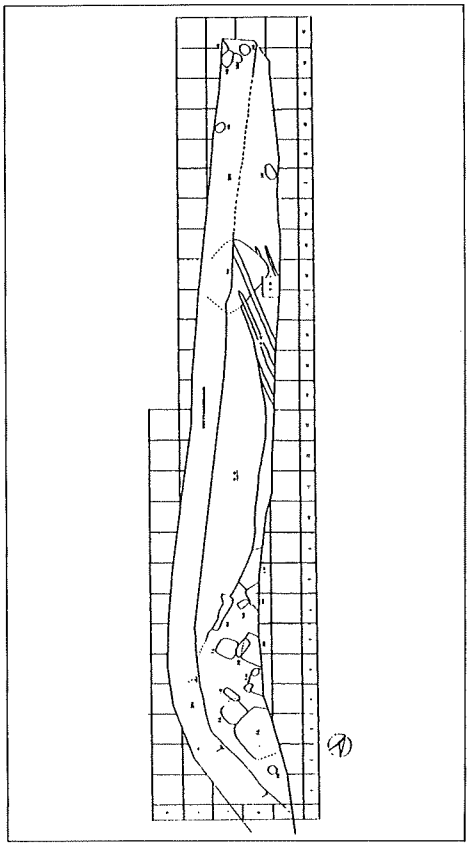
10世紀前半（平安時代中葉）---------- H4

10世紀末～11世紀前半（平安時代中葉）----- H5

H1・6号住からは，赤塚次郎氏の分類によるC類に当るS字状口縁台付甕，小型高坏，小型器台，小型台付甕などが出土しており，恒川編年Ⅶ期（布留古段階）に該当する。

平安時代の住居址にはH2・4・5号住がある。H2号住から土師器甕，須恵器坏が出土しているのに対して，H4・5号住居址には須恵器杯はなく，代って虎渓山1号窯式，光ケ丘1号窯式の灰釉陶器が出土している。

今回の調査では，台地の全容を把握するには至らなかったが，今後の調査によって，本遺跡に展開する集落の一端でも明らかにされることを期待したい。



第2図　宿上屋敷遺跡遺構配置図（1：1000）

下川原・光明寺遺跡の調査 －検出された中世遺構と安養寺－

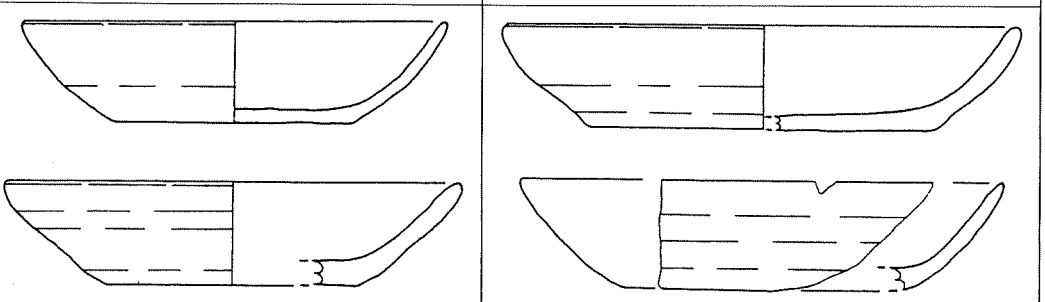
小　山　岳　夫

下川原・光明寺遺跡は佐久盆地平坦部の最も東端，佐久市安原の標高710ｍ内外の僅かな傾斜をもつ，小台地上に位置している。遺跡南側には霞川が南流し，東側には平尾山塊が眼前に迫っている。遺跡周辺を取り巻く歴史環境は，安養寺・英多神社などの鎌倉・平安時代からの古い歴史をもつとされる寺社が近接する。

道路工事に伴う調査であるため，幅30ｍ弱の小範囲の調査であったが，中世に比定される竪穴状遺構1基，溝状遺構2基が検出され，該期における安原地域の歴史様相の一端が想定されるに至った。竪穴状遺構は一辺10ｍ内外の規模をもつ大型の方形竪穴の建物址で，柱穴はもたず，礎石と考えられる偏平な大石が壁直下の床面上の各所に点在していたが，南西側は破壊が著しいため，総合的な配置は明らかでない。炉カマド等は検出されなかった。溝状遺構2基は竪穴状遺構北側に接し，いずれも直線的に調査区外まで伸びるため，全容は明らかでない。両者合せて方形区画を呈すると考えられ，未調査

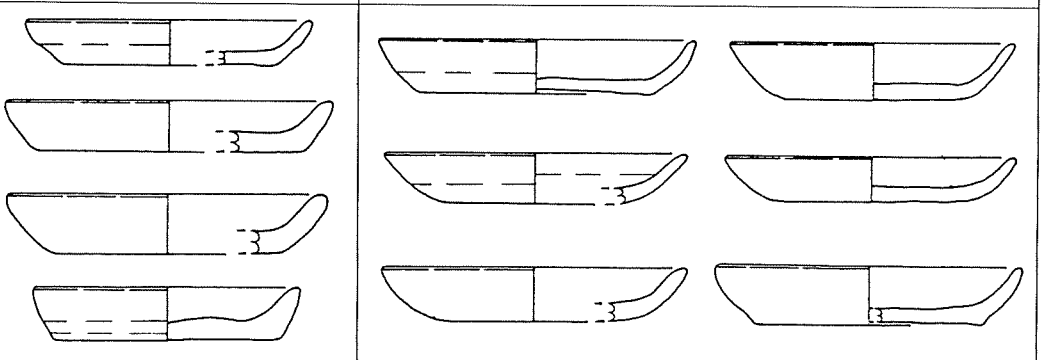
A1　大型品，口辺部は内彎気味に開く。
胎土は赤みを帯び，きめが粗い。

A2　大型品，口辺部は内彎気味に開く。
胎土は白みを帯び，きめ細かい。

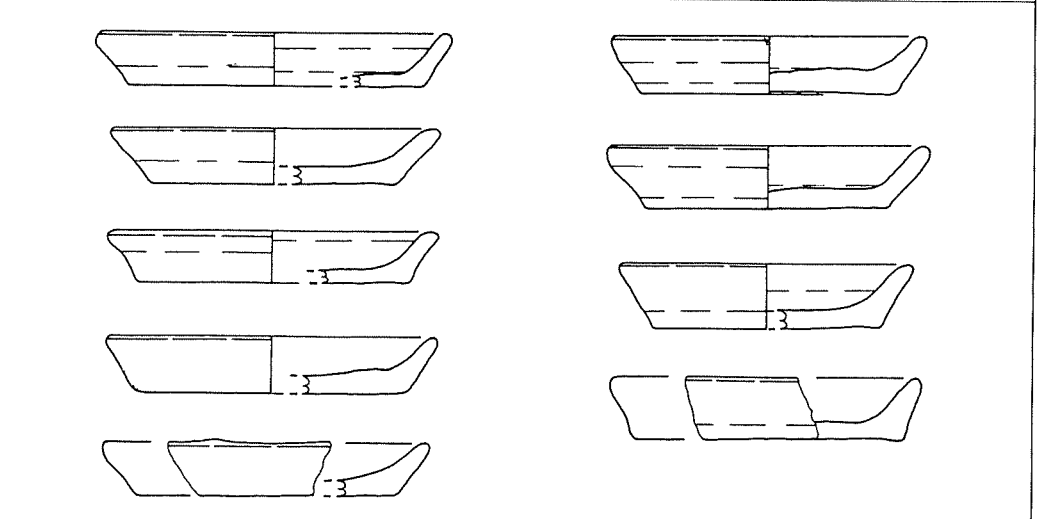


B1　小型品，口辺部は内彎気味に開く。
胎土は赤みを帯び，きめが粗い。

B2　小型品，口辺部は内彎気味に開く。
胎土は白みを帯び，きめが粗い。



B3　小型品，口辺部が直線的か，やや外反気味に開く。
胎土は赤みを帯び，きめが粗い。



第3図　下川原・光明寺遺跡土師質土器小皿分類図（1：2）

部分の溝区画内には生活址の存在も想定できる。また，東側の第１号溝は，両縁に人頭大の礫が整然と配されていた。以上の３基の遺構覆土はいずれも炭化材，炭化物を多量に含有することで共通しており，特に竪穴状遺構床面上には炭化物が厚い層を成して堆積していた。炭化物の分布は中世遺構内だけでなく，本遺跡遺構確認面でも一様に認められることから，中世代において本遺跡一帯に相当規模の火災のあったことが想定できる。

出土遺物は土師質土器小皿（かわらけ），中国産磁器，国産陶器（常滑，珠洲，瀬戸・美濃系），鉄製釘，炭化米などがみられる。土師質土器小皿が圧倒的に多く，693片出土しており，概して薄手で口径12cm内外の大型品（A）と口径８cm内外の小型品（B）に分けることができる（第３図参照）。本報告では在地の比較資料に恵れないため，時期の特定は行っていないが，陶磁器の年代や他地域の「かわらけ」の編年観から14世紀後半～15世紀代に位置づけられそうである。陶磁器は出土量は少ないが，13世紀後半～15世紀の製品主体で，椀・皿等の供膳具や四耳壺・瓶子などの祭祇用具が主体を占め，擂鉢，捏鉢等の調理具は少ない。土器類全体をみると供膳具が主体を占めており，特に多量の土師質土器小皿の存在は往時の一般集落には見られない傾向であると言われ，本遺跡が特殊な性格を有すること，つまり寺社に関連する遺跡であることが想定できる。このことは中世において土師質土器小皿（かわらけ）が寺社においては祭事に多用され，その際には毎年大量の「かわらけ」が購入されていたという当時の記載からも裏付けられる。

これら今回の調査成果から，数次の火災によって移動が行われたと言われる安養寺は中世において本遺跡周辺に占地していた可能性が強いことが想起され，調査で検出された遺構は安養寺に関わる何らかの施設と考えることもできるのである。今後，この周辺の調査・研究に一層の期待が寄せられよう。

会費納入のお願い　昭和61年度の会費納入状況は３月現在で５割に達しておりません。円滑な学会活動を促進するためにも，会費未納の方は今すぐ会費の納入をお願いします。

（会計幹事）

▶編　集　後　記◀

本号は，昭和61年度に実施した発掘調査の報告とその成果を掲載しました。一連の調査の他に，関越自動車道の調査も開始され，佐久地方は発掘調査のピークを迎えているといっても過言ではありません。これらの様子を今後も通信によりつぶさにお伝えをしたいと思っています。ご期待を。（福島）

佐久考古通信 No. 40

発行所　佐久考古学会（転局）
南佐久郡小海町東馬流5047
井出正義方
TEL（0267）92-3171

発行者　由井　茂也

編集者　井出・福島・花岡・堤
羽毛田